
異世界への扉

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界への扉

【Nコード】

N0055U

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

大橋和明は高校への通学途中不思議な扉を見つける。その扉をくぐるとそこは異世界だった。ア然とする和明であったが不思議な扉は姿を消していた。しかたなく異世界でなんとか生計をたて生き抜こうとする。そんな物語。

1話

今の季節は秋。清涼感たっぷりの風が吹いている。

おおはしかずあき
大橋和明は中肉中背の割と顔のパーツが整った美男子である。

和明は高校へ登校途中に道の真ん中に扉を見つけた。しかし、この扉は他の通勤途中のサラリーマンや通学中の学生には見えていないようで他の人は興味を示さない。しかもその扉にぶつかった人々はまるで扉をすりぬけるように歩いていく。

和明は辺りをキョロキョロしながら古く大きな扉を押し開き中に入っていく。

眼前に広がっていたのは中世ヨーロッパ風の建物や歩く人々達だった。

辺りの景色にほうけていると和明がくぐった扉は姿を消していた。

「な！」

焦った和明は辺りをくまなく探したが何も見当たらなかった。

気をおとしがつくりうなだれている和明の肩が叩かれた。

和明が振り返ると西洋風の鎧に身を包んだ立派な体格の男が立っていた。その男は言った。

「セブラス王子を見つけたぞ！」

和明は言った。

「え、だれ？」

男がそういうと三人の男達が寄って来た。彼等も鎧に身をつつんでいた。寄って来た男達は和明をねぶみするようにながめ、皆口々に言った。

「確かにセブラス王子だ。しかし珍しい服を着ているな」

和明はこの時学ランを着ていた。

「裏切り者のセブラス王子がまだ城下町にいたとは驚きだ。連行しよう」

すると体格の良い兵士が和明の両手に手錠をかけ手錠と繋がっている鎖を引っ張っていく。

暴れる和明は言った。

「俺は和明だ！ セブラスなんかじゃねえ」

和明を引き連れ四人の騎士は街中を歩いていく。街の娘達が話声が聞こえてきた。

「セブラス王子は戦争の真っ只中なのに城から逃げたしたんでしょ？」

「そうらしいわよ」

十分程歩いた和明と四人の騎士は城門まで来た。一人の騎士は言
った。

「開けてくれ！ 王子を捕まえた」

すると城門の橋が下ろされ門が開いた。

つづく

2話

ここは豪華な造りの王の謁見の間。大きなシャンデリアが幾つもあり天井を華やかにしている。

何段か高い所にある椅子に腰掛けたルーブラ王は言った。

「セブラスよ、なぜこんな大事な時期に城から逃げ出したのか？士気にかかわるではないか！」

後ろ手に手錠をされ、膝をついた和明は言った。

「だから、俺はセブラスなんかじゃねえ！ 和明だ！」

王は怒った口調で言った。

「わしにまでそんな低俗な嘘をつくのか！」

「だから、違うもんは違うんだ！」

「ええい不愉快じゃ。お前のようなやつは我が子でもなんでもない！ お前に死刑を言い渡す。処刑日は三日後じゃ！ それまで牢屋に入れておけシュナイダー！」

「はっ！」

立派な体格の兵士は和明の手錠と繋いだ鎖を引っ張り和明を謁見の間から引っ張り出した。

和明は言った。

「痛いってば！」

シュナイダーは言った。

「なぜ、勇敢だったあなたは国を捨てられたのですか？」

「だから俺は王子じゃないっての！」

シュナイダーは悲しそうに言った。

「もう、そのような言い訳は聞きたくありません」

和明はシュナイダーに引き攣られ豪華な城の内部を階段を下り下へと進んでいく。地下にくると粗雑な造りに変わった。ランプの光だけのため薄暗い。地下を少し歩くと牢番がいた。シュナイダーは言った。

「カルツ、王子のことは頼んだぞ」

「はい！ シュナイダーさん」

カルツに連れられ一番手前の牢屋に和明は入れられ手錠を外された。牢番から嫌な臭いが立ち込めていた。牢屋にあったのは便器とボロボロのベットの二つだけであった。

和明は自分の不幸を呪っていた。あの時、不思議な扉をくぐらなければ死刑にならなくてすんだのにと。

和明はベットに座り頭を抱えた。

そんな時牢屋の小さな隙間から何かが差し入れられた。

「セブラス様、昼食です。こんなものしかありませんが召し上がってください」

和明が目をやると牢番のカルツが昼食を差し入れていた。盆の上には一枚の食パンと冷めたスープがのっていた。

とても食べる気になれない和明はぼろいベットに横になり涙を流した。

{つづく}

3話

牢屋での三日間はあっという間に過ぎた。三日間何も食べていないためか和明はげっそりしていた。眠ってもいない。

そんな時カルツとシュナイダーが和明の牢屋の前に立っていた。

「セブラス王子、時間ですので……」

シュナイダーはそれしか言わず和明に手錠をつけた。シュナイダーに手錠に繋がっている鎖を引っ張られ地下の階段を上り、一階のある扉をくぐるとそこは城の広い庭だった。庭には兵士と国王さらにはギロチン台が準備されていた。

ギロチン台をまのあたりにした和明は気が狂わんばかりに頭を振りギロチン台に近づくのを嫌がった。

「嫌だ！ 俺はセブラスなんかじゃねえ」

王は言った。

「ここまできて見苦しいぞ。それぐらいの気概はみせよ！」

和明はギロチン台にセットされ後はギロチン台で首を切り落とすだけとなった。

王は言った。

「これから――」

突然庭に乱入してきた兵士は言った。

「セブラス王子が十万の兵士を連れられご帰還なされました！」

王は言った。

「なに？」

そこに和明とそっくりの顔のセブラス王子がやって来た。

「父上！ 隣国ラバスタより十万の兵士を借りてまいりました」

「なんと十万！？ それならタイザス国に勝てる！」

「父上、私はこれから十万の兵を連れ前線にうってでます。後のことはまかせます」

「うむ！」

セブラス王子はマントを靡かせその場を去った。

和明は言った。

「だから、言ったじゃねえか、別人だって！」

王は言った。

「ギロチン台を外してやれ！」

「はっ！」

兵士により和明はギロチン台から解放された。和明は言った。

「よかったー。本当に殺される所だった」

王は腰を曲げ謝った。

「すまなかった！ えー、和明殿。あまりに容姿がそっくりなもの
でな。本当にすまなかった。今一度謁見の間まで来て欲しいのじゃ
が」

ここは、謁見の間。

「和明殿に詫びの品を渡せ」

「はっ！」

一人の兵士が小さな袋持って和明に近づき渡した。和明は中身を
みると数十枚の金貨が入っていた。

「これで許してもらえとは思っておらん。本当にすまんかった」

「いくつか質問があるんだけど？」

「なんなりと聞いてくれ」

「この世界で手っ取り早く生きていくにはどうしたらいい？」

「そうじゃな……魔魂を開化させ、ギルドの仕事をこなすとかはど
うじゃ」

「魔魂ってなんだ？」

「魂を武器に変える、その武器のことじゃ。シュナイダー見せてや
れ」

「はっ！」

和明の後ろにいたシュナイダーが立ちあがった。和明も立ち上がりシュナイダーに視線をおくる。シュナイダーは右手を胸の前まで持ってくると胸からなにかを引き抜いた。その正体は大きな剣だった。

「あれが魔魂じゃよ」

「どこに行けば魔魂を使えるようになるんだ？」

「街にある魔魂屋じゃよ」

「わかった、サンキュー」

{つづく}

4話

今は昼過ぎ。

和明が投獄された国は戦の勝利でどこもかしこもパーティーがひらかれていた。そんな騒がしい街を和明は歩いていた。

「あったここが魔魂屋か」

魔魂屋と書かれた看板を見つけた。なぜ、この世界の文字が読めたり言葉を理解できるのか和明は疑問に思った。和明は魔魂屋の玄関に近づいた。そしてドアノブを回し中に入ると中は薄暗く、机と二つの椅子と水晶玉が机に置いてあるだけの店だった。

「へい、いらっしゃい」

怪しげな雰囲気店の店員が和明に話しかけてきた。

「魔魂を開化させたいんだけど……」

「じゃあ、椅子に座ってこの水晶玉に両手で触れてくれ」

和明は椅子に腰掛け両手で水晶玉に触れた。店員は反対側の椅子に座った。水晶玉は青色から金色に変わり金色に輝き始めた。薄暗かった室内が金色に染まる。

店員は言った。

「後は己の魂に打ち勝つだけだ」

「魂に？ 勝つ……」

そこで和明は意識を失いテーブルに突っ伏した。

次に和明が見たものは数百メートルかくの白い箱型の部屋だった。辺り一面白い。和明は立ち上がると人が居ることに気付いた。その後ろ姿は見覚えがあった。

「もう一人の俺？」

後ろ姿の人物は振り反った。その人物の容姿はどこから見ても和明だった。

「やっと会えたね」

「お前がもう一人の俺？」

「そうだよ。これを渡しておくよ」

もう一人の和明は剣を自身の胸から引き抜き和明に向かって細身の剣を投げてきた。慌ててかわす和明。剣は地面に突き刺さった。和明は白い地面から剣を抜きもう一人の和明に剣先を向けた。もう一人の和明は言った。

「戦うんだね僕たち……」

「魔魂を手にするためにはお前を倒さなくちゃならない」

そういうと和明はもう一人の和明に全力で近づき横切りをはなった。かわすもう一人の和明。和明は自身の身の軽さに驚いた、まるで自分の重さが一枚の鳥の羽のように軽い。もう一人の和明は髪を

かきあげながら言った。

「驚いたようだね」

「どうなっているんだ」

和明は自分の身の軽さに驚いていた。

「それはその魔魂の能力さ。重力を無視できるんだ」

和明は剣を中段に構えながら言った。

「重力を無視？」

もう一人の和明は胸に右手を持っていきました何かを引き抜いた。
それは黒い細身の剣だった。

「条件は同じだよ」

そういうともう一人の和明は一瞬で和明との距離をつめ剣を下から切り上げた。切り結ぶ和明。力は拮抗していた。和明は右斜め上からの袈裟切りをしかけた。それを黒い剣で受け止めるもう一人の和明。それから幾重にも切り結んだが決着はつかず、二人は距離をとった。もう一人の和明は言った。

「力も能力もなにもかも同じなら勝負はつかないよ」「どうやってこんなやつ倒せていうんだ？ お前はもう一人の俺なんだよな？」

「そうだよ」

和明は左手を前にだし剣を突きたてた。

「くっ！」

和明はもう一人の和明を見た。するともう一人の和明も左手から出血していた。

「自殺行為だよ、イテテ」

和明は剣先を自身の腹に向けた。そして、勢いをつけ突き刺そう

「待った、僕の負けだ」

もう一人の和明は剣を白い地面に置き両手を挙げていた。

「やっと……勝ったぜ」

「機会があつたらまた会おう」

和明ははめまいがして膝を着いた。剣を落とす。そして意識を失った。

目を覚ますとそこは薄暗くこ汚い魔魂屋の中だった。

店員が言った。

「あんた、あんまり長いこと意識を失ってたから心配したよ。魔物は倒せたのかい？」

「魔物？ 戦ったのはもう一人の自分だったよ」

店員は驚いた口調で言った。

「もう一人の自分？ そんな人初めてだ」

「そうなのか？」

「うん。料金は金貨一枚だよ」

和明は料金の金貨一枚を店員に払って店を出た。外は夕日が辺り照らし一日の終わりを示していた。相変わらず街中はタイザス国に勝利したことでもちきりのようであった。酒屋からは騒がしい話声が聞こえてきた。

宿屋の看板を探し和明は街中を歩いていた。すると武器屋の前で人だかりを見つけた。

「お嬢ちゃん！ 人にぶつかっておいで謝りもしないのか？」

鎧を着た髭面の大男が肩に斧を置き小柄な女の子にすごみをきかせていた。女の子は小柄で端整な顔だち、赤い瞳を持ちスレンダーな体型をしていた。

和明は人垣をかきわけ大男の前に立ちはだかった。

「それぐらいにしとけよ。オッサン」

和明を見た大男は不機嫌そうに言った。

「邪魔するきか小僧！」

大男は斧を横なぎにはらった。和明はしゃがんで斧をかわしながら胸に右手を持って行き細身の剣を引き抜いた。

〜
つづく
〜

5話

髭面の大男は斧で縦切りをはなった。それを凄まじい速度でかわす和明。和明は大男の後ろに立ち剣先を大男の背中に軽く当てた。

「オッサン、まだやるかい？」

「ちっ！ わかったよ」

剣を下に向ける和明。髭面の大男はその隙を逃さず斧を振るった。焦る和明。

「あ、やべ！」

鉄と鉄のぶつかり合う音が響いた。大男の斧を絡まれていた美少女が体格に似合わない大剣で防いでいた。

美少女は言った。

「……油断大敵」

髭面の大男は言った。

「二対一か……不利な戦いはごめんだ」

そういうと街中を走って逃げて行った。

ここは宿屋。二階建ての建物で内装は綺麗に掃除されている。埃一つない。入口近くのレジで和明は一日泊めて欲しいと頼んでいた。「って、なんでお前までいるんだ!？」

後ろを見て怒鳴る和明。そこには髭面の男に絡まれていた小柄で髪が背中辺りまである美しい容姿の女の子がいた。

「……行くところない」

ため息をつく和明。しかたなく店員にもう一部屋借りる手続きをする。

宿屋の部屋には光りを燈すランプ、柔らかいベットと机と椅子が置かれていた。

「だからなんでこの部屋にいるんだ!？」

「……話がある」

ベットに座った和明は学ランを脱ぎ椅子にかけた。

「話って？」

「……ついていっていい？」

「うーん。他にあてはないのか？」

「……ない」

腕を組んで考えこむ和明。

「わかった。いいよ」

和明に抱き着く女の子。和明は慌てる。

「お、俺は和明っていうんだ。お前名前は？」

「……ルナ」

「そうか。じゃあもう早いから寝よ」

そういうと和明はルナを部屋から出し鍵を閉めた。そしてランプの火を消し布団を被った。

翌日の朝寝苦しさに和明は目を覚ました。（なんか重い……）

和明は視線を下に向けると布団を被ったルナが和明の上に乗っていた。

「っておい！　なんで乗ってんだ！」

和明の大きな声にルナは目を覚ました。彼女は目を擦りながら眠たそうな顔をしている。和明はルナを持ち上げるとベットから下ろした。

「ルナ、どうやって入って来たんだ？」

ルナはドアを指差す。そこには無残に壊れた扉があった。二人は宿屋の店員に扉を壊したことでこってり怒られ、弁償金を払って宿屋を後にした。

～つづく～

6話

和明はルナと連れだってギルドに来ていた。ギルドの中は受け付けと依頼内容が納められたファイルが置かれたいくつかの机と椅子で構成されていた。割り綺麗だ。いくつかの机には戦士と思われる男や全身を鎧で着込んだ男達が座っていた。

和明達は受け付けに来ていた。受け付けの目鼻立ちが整った綺麗なお姉さんに話を聞いていた。

「まず登録するとEランクの称号が得られます。するとEランクの仕事を受けられるようになるの……それで十回Eランクの仕事を成功させるとランクがDランクにアップするの……後は必要な時に話すわ」

綺麗なお姉さんに和明が鼻の下を長くして話を聞いているとルナに足を靴でおもいきり踏まれた。

「いてー！　なんで踏むんだよ」

「……ふん！」

受け付けでEランク登録した二人は一つの空席に座りファイルをめくっていく。

「これなんかどうだ。畑を荒らすイボミミズ退治、銅貨五個」

「……いいね」

ということで二人は依頼のあった畑に来ていた。

そこには畑の野菜をバリバリ食べる一メートルはあろうかというイボがたくさんあるミミズが数十匹いた。

「……う」

ルナはうずくまり下を向いた。心配した和明はルナに聞いた。

「どうしたんだ？」

ルナは声にならないような声で言った。

「……気持ち悪い」

ということで一人で退治することになった和明は胸元から細い剣を引き抜いた。和明は一番近くにいたイボミミズに瞬くまに接近すると上から下に切り付けた。切られて半分になったイボミミズはピクピクと痙攣している。二匹目に狙いをつけるとイボミミズを真つ二つに両断した。それから一時間した広大な畑にはイボミミズの死体が数十匹転がっていた。一仕事終えた和明は畑に腰をおろした。

「いっばいいて疲れたー」

「……お疲れ様」

「ありがとうございます」

声の方を見ると太ったおばさんが立っていた。このおばさんが依頼主だ。依頼書におばさんからサインを貰い帰路についた二人。

「次は期待してるよ」

「……ごめん」

謝り俯くルナ。どこか悲しげな雰囲気をおびている。

「そういえば……異世界についてなにか知らないか？」

「……異世界？」

考えている表情のルナ。答えをじっと待つ和明。

「……西の遺跡に異世界への扉があるって聞いたことがある」

「異世界へ行けるのか？」

「……わからない」

現世に帰る手段を見つけたかもしれない和明は喜んだ。

{}つづく{}
}

7話

仕事を済ました和明とルナはギルドに来ていた。まだ昼間だけあって人がたくさんいた。和明は受け付けの太った女性に依頼書を渡す。女性は言った。

「ご苦勞様。はい、銅貨十個ね」

「ありがとう」

銅貨を受け取った二人は椅子に腰掛け依頼書のファイルをめくる。

「次はどれにする？」

「……これ」

ルナが指差したのは商人の護衛の仕事だった。銅貨十五個。

ということで商人と待ち合わせ場所で出会った。ふっくらした商人は言った。

「私はドレッサーです。ここループ国から隣国のラバスタの間によく山賊が現れるため君らを雇ったんだ」

「わかった。山賊を撃退すればいいんだな」

「……了解」

荷馬車を操る商人とその左右を警護する和明とルナ。馬車は人が歩く速度で道をゆく。中々立派な馬車だ。しばらく進むと国境がみえてきた。その先は森になっていた。その時馬車の前を三人の男達が遮った。馬が暴れる。

「俺達は山賊だ命が惜しかったら金めのものを置いていきな」

所々破れた服を着て髭も伸ばしぱなしの三人の山賊だった。手には皆ナイフを握っている。

ルナが魔魂をだし一人の山賊に切り掛かる。山賊は咄嗟にナイフで防ぐもナイフがくだけた。そしてルナは大剣の腹で山賊の頭をおもいっきり叩いた。一人目の山賊は気を失った。

和明も魔魂を出し残りの二人の山賊の服を切り裂き裸にした。

「覚えてろよ！」

山賊達はそう言うのを失った一人を抱えながら逃げ出した。気が絶している山賊以外はすっ裸だった。

それからは何ごともなくラバスタ国の正面の門に到着した。商人から依頼書にサインをもらい商人と別れた。

「……山賊弱かったね」

「そうだな」

二人は帰路についた。

{つづく}

8話

和明とルナはギルドの仕事に明け暮れ。ランクをDランクに上げていた。二人は今日もギルドに来て依頼書の詰まったファイルを見ていた。

「……これどう思う？」

「ああ、魔物ベリの討伐か……次はこれにしようか」

ということでループ国の東にある小さな村に来ていた。

ここは二階建ての村長の家。その一室に村長と話す二人の姿があった。

「東の森から現れた魔物のベリがこの村を襲いだしたんですね」

村長は立派な顎髭を摩りながらいった。

「そうじゃ」

話していると騒がしい音をたて何者かが階段を上がってくる音が聞こえた。そして和明達の居る部屋が力いっぱい開かれた。そこには髪が乱れ荒い呼吸をする村人が立っていた。村人は慌てた声でいった。

「村長！」

「なんじゃ？ 騒がしい」

「ベリが村に姿を現しました！」

「なんと！　こんな昼間から現れるとは珍しい。和明殿任せましたぞ」

和明は立ち上がりながら言った。

「ああ、わかった」

和明とルナは急いで木造建築の村長宅をでた。

「うわ、助けてくれ！」

足をくじいた男が熊に似たベリに物置の壁まで追い込まれていた。ベリは盛大に口からよだれを垂らしながら足を怪我した男に向け鋭い三本の爪がある右手を振り下ろしてきた。恐怖で目をつぶる怪我をした男。しかし、いくら待っても痛みはおそってこなかった。恐る恐る目を開ける男。

そこには細い剣で魔物ベリの右手を防いでいる和明の姿があった。和明は言った。

「ルナ！　その怪我した男を安全な場所まで移してくれ」

怪我をした男に肩を貸すルナ。足を怪我した男を安全な場所まで運んで行く。

和明は横なぎに剣でベリに切りつける。それをベリは固く太い爪で弾く。次に和明はベリの背後に周りこみ十字に切りつけた。悲鳴を上げるベリ。ベリは振り向き和明に突進してきた。かわす和明。

ベリは建物の壁にぶちあたり壁を粉碎した。その隙を逃さず和明は踏み込みベリの背中深くに剣を突き立てた。血を吐き暴れるベリ。和明はさらに力を剣にいれベリに突き刺した。ベリの動きが鈍り手足をばたつかせ地面に倒れた。ベリの血が辺りに滲んだ。

和明は地面に腰を下ろし言った。

「なんとか倒せたな」

和明は東の森から叫びながら近づいてくるものに気がつき急いで立ち上がった。

和明が森の方を振り向くとベリの二倍はあろうかという魔物がたっていた。ものすごく殺気だっている。ルナも和明の隣に大剣を持ち急いでやってきて言った。

「……あれはベリの変種ベリアル」

「知っているのか？」

「……逃げた方がいいかも」

{つづく}

9 話

「俺達が逃げたらこの村の人達があぶない。だから逃げない。ルナは逃げてもいいぞ」

和明はベリアルルの放つ桁外れの殺気に額から濁流のような汗を流す。ルナは無表情に言った。

「……私も戦う」

ベリアルルは二メートルをゆうにこす体で四本足で突進してきた。避ける二人。ベリアルルは二階建ての建物にぶちあたった。倒壊するその建物。ベリアルル平然と立ち上がると和明に接近し右腕を振り下ろした。剣で受け止める和明。あまりの威力に和明の足が地面に軽くめり込んだ。

「っ！」

足をとられ動き遅れた和明に左手を左から右にはらうベリアルル。その左手をルナが大剣で防いだ。しかしベリアルルの強大な力に吹っ飛ぶルナ。

「……う！」

その隙に和明は足を地面から抜き、剣でベリアルルを五回切った。しかしあまりの皮膚の硬さに剣が弾かれた。

ベリアルルは右手の爪で和明を突いてきた。横っ跳びでさける和明。ルナがジャンプしてベリアルルに大剣で切りつけた。少しでも少いことで少量の血がでる。

和明はルナの大剣の腹を足場にしジャンプした。そしてベリアルに近づき剣をベリアル目の突き刺した。叫び声を上げるベリアル。両手を振り回し暴れるベリアル。

「ちったあ効いたか？」

和明はさらにベリアルの開いた口深くまで剣を刺した。血を吐き出すベリアル。ついには膝をつき倒れた。

夕日が眩しい時間帯。村長に依頼書にサインをもらおう和明。村長は真剣な声で言った。

「ありがとう。君達のおかげで村は救われた」

依頼書をしまいながら和明は答えた。

「それはよかった。ただ予想外のこともあったがね」

{つづく}

10話

和明とルナは眠気を誘う温かさのなかコースの森を闊歩していた。生い茂った木々や膝もとまで生えた草や植物が邪魔で歩きづらい。だがかれこれ一時間歩いているため二人は慣れてきて歩速が上がってきていた。

「ルナ、ガジュマルの木はあったか？」

「……まだ無い」

今回はギルドの依頼でガジュマルの実の採取に来ていた。青々とした森はどこまでも続いているように見えた。和明は木々を掻き分け進む。その後ろをルナが追う。すると開けた空間に出た。その空間は木は無く円形に草原が広がっていた。するとルナは指差し言った。

「……赤くて星型の実がある」

和明も視線を上げ星の形をした実を視界に入れた。二人は草原を走り一メートルくらいの高さの木に近づいた。そしてルナが星をもした実に手を伸ばした。その瞬間細長い枝がルナの腕に絡み付いた。そして軽々とルナを持ち上げた。

「……うわ？」

危険を察知した和明は自身の胸元から魔魂を引き出した。キラリと陽光を浴びて和明の細身の刀身が光った。和明はジャンプしながらルナの手足を縛っている枝を裁断した。支えを無くし落下するル

ナを和明はお姫様抱っこの形でキャッチした。ガジュマルの木には顔と口があり

「ゲゲゲ！」

と唸った。和明はガジュマルの木から一メートルぐらい幅をおくとルナを地べたへ下ろす。なぜかルナの頬が桃色に染まっていた。ルナは和明には聞こえない程微かな声で

「……エッチ」

和明はガジュマルの木に横切りを放った。木はバターのようにすっぱり切れた。倒れふすガジュマルの木。安心したのもつかの間、辺り一面からモンスターの叫び声がこだました。他の生息していたガジュマルの木が仲間を殺され怒ったようだ。二十本ぐらいのガジュマルの木は枝を伸ばしながら接近して来る。ルナも魔魂である大剣をひきづりながらガジュマルの木々に突進していく。枝がルナの顔を打とうと迫る。僅かに右に体を傾けかわすルナ。そして片手で大剣を振り上げ右斜め上から袈裟切りを仕掛ける。両断されるガジュマルの木。断末魔をあげる。

「ゲゲゲ」

和明達は十分程ガジュマルの木と乱戦した。生き残った二本のガジュマルの木はあわてふためき逃げ出した。ルナは倒れているガジュマルの木から実を引きちぎり言った。

「……依頼完了」

和明もガジュマルの実をむしり取り匂いを嗅ぐ甘いほのかな香りがした。和明は星型の尖った実の部分を一かじりした。メロンに少し塩を塗した味わいだった。和明とルナは背負っていた革の袋にガジュマルの実をただけ詰め込んだ。

つづく

11話

「ルナちゃん好きな食べ物は何ー!？」

このハイテンションな美少女はミルキー。髪は首元まででスレンダーな外見に切れ長な青い瞳の持ち主である。今回はギルドで出会ったミルキーと三人で依頼に臨む。ルナは瞳がハートになったミルキーの質問に返答する。

「……パンニ」

パンニは外見は苺で味はチョコレートに近い食べ物だ。ルナに抱き着いたミルキーは

「はあはあ、ルナちゃん。かわいいったらありやしない！」

と声を荒げていた。ルナがミルキーの目を見て呟いた。

「……ミルキー、苦しい」

「あ、ごめんなさい」

ミルキーはルナの首に回していた両腕を解いた。今はガリオン鉱山内。蛭に似た虫が黄色く発光し至る所にいて明るい。ルナによるとルブルと言うらしい。三人は歩いているとルブルを踏ん付けてしまふ。なんか可哀相だ。

「ルナちゃんはパンニのどこが好きなの!？」

ミルキーは衰えを知らない快活さだ。

「クエー！」

「ルナちゃんは……」

「クエー！」

「……楽しみは……」

和明達の三人の前にクエーと鳴く蝙蝠を膨らまして赤く色を塗ったモンスターが現れた。そのモンスターは羽をばたつかせ飛ぼうとしているようだが太っちょのため十センチメートルぐらいしか飛べていない。そして息を切らしていた。ミルキーは額に怒りの皺をつくると

「私とルナちゃんの言葉のやり取りを邪魔するなんて許せないわ！」

駆け出したミルキーは胸の前に手をやり硬そうな鉱石をあしらったハンマーを引き抜き太っ腹の蝙蝠の腹に一撃をくらわした。モンスターは

「クエー……」

と言うと意識を失った。ミルキーは胸元にハンマーをしまおうとルナにまた話しかけ始めた。今回の目的はこの鉱山にあるコルナという紫色の水晶の獲得だ。ルブルに照らされた不気味な雰囲気のある鉱山を三十分程行くと広間のような場所に出た。そこにはコルナが岩の上から飛び出していた。コルナを見つめながらコルナに近づいて行く。するとノソノソとコルナとその下の岩が動いたではないか。よく見るとコルナは亀のようなモンスターの背中にあった。早速臨戦体勢

に入る三人。全員魔魂を出現させる。和明が真っすぐ走り切り掛かる。弾かれる剣。ルナがモンスターに向かって右から横に大剣を振るう。少し食い込むがそれ以上のダメージは与えられない。ルナに体当たりを食らわす亀型のモンスター。ルナは剣を引き抜き受け身をとる。ミルキーが声だかに言った。

「どうやら私の出番みたいね。二人共さがってて」

ミルキーは足が赤く発光したかと思うと天高く飛んだ。そしてハンマーをモンスターの背中に振り下ろした。鈍い金属音がしたかと思うとモンスターの背中にあった紫色の水晶コロナがのいた。モンスターは地面に倒れた。

コロナを入手して帰還する三人は談笑していた。和明は尋ねた。

「ところでさ、さっきの足が赤く光ったのて何？」

「強化魔法よ。脚力を強めたの」

ルナは小首を傾けながら聞いた。

「……どうやってやるの？」

「ルナちゃんかわいいから教えてあげる！ 人はね魔力を生まれながら持つてるのそれを足に集中させるのよ」

和明は目を光らせて尋ねた。

「具体的にはどうやったらいいんだ？」

「和明、知りたいなら交換条件よ。私もこのパーティーに入れること。そしたら教えてあげるわ」

和明は快諾した。

「いいよ。喜んで。戦力がアップするしね」
ルナは

「……私にあんまり抱き着かないならいいよ」

「決まりね！　よろしく和明にルナちゃん！」

こうして和明のパーティーは三人になった。

～つづく～

12話

涼しい風が肌に気持ちいい午後。ループ国の広場に和明達三人の姿があった。

「ルナちゃんいいわよ！ その調子！」

今日はミルキーに魔法を教わっていた。午前中からの練習がこうをそうし和明とルナは強化魔法を体得した。和明は右手を赤く光らせ剣を縦に振るう。ブンという凄まじい音がした。広場にいた犬を散歩する女性が空を見て叫んだ。

「赤い肌！ 魔族よ！」

広場にいた人々は空を見上げた。腕を胸の前で組んだ赤い肌の男が徐々に降りてきた。

「私はルーク。皆の者、力比べをしようぞ」

騒ぎを聞き付けた三人の巡回兵が青い顔で魔魂は取り出し立ち向かう。一人目の兵士は黄色い槍をルークに向け突いた。ルークは目をつむり右に体の重心をずらしかわす。ルークは言った。

「私に一度でも目を開かせたら殺戮は止めてやろう」

そして二人目の兵士は緑色の弓で光りの矢を放った。ルークはまだ目をつむったまま矢を右手で掴んだ。槍を何度もかわしながら。三人目の兵士は日本刀みたいな刀で切り掛かった。またあっさり避ける。ルークは

「つまらん」

と言うと槍を持つ兵士を蹴りで吹っ飛ばし弓で矢を放っていた兵士に瞬時に近づくと言を右手で絞めた。そこへ刀で突きを放った兵士の刀を左手で折った。刀を折られた兵士は気を失い倒れた。弓を持つ兵士は泡を噴いた。和明はルークに向かい駆け出した。和明は重力を無視し高速でルークの後ろに回りこむと横に剣を振った。ルークは兵士を離し一瞬で和明に振り向くと胸元から黒い龍の柄が施された槍を引き抜き和明の会心の一撃を防いだ。和明はニヤリとして言った。

「目を開けたらなんだって？」

ルークは自分の行動に驚いた顔をしぞめた。

「まさか、これほどの使い手がいるとわ。目を開いたうえに魔魂を使う羽目になるとわ。ハハハ、よかろう！ お前に免じて今回は退いてやろう。そなたは名を何と言う」

「和明だ。ルーク」

和明は中段に剣を構え神経を集中している。ルークは「ククク」と笑うと魔魂をしまった。

「和明とやら、良い余興であった。褒めてつかわすぞ。今度は真剣に戦おうぞ。さらばだ」

ルークは翻し回転すると姿を消した。和明はそれを見ると片膝をついた。援護しようとしていたルナとミルキーが和明に近づき声をかけた。

「和明大丈夫？」

「……怪我は？」

「大丈夫だ。ただ奴の殺気に気圧されただけだ」

和明は立ち上がった。和明の額には大量の汗が滲んでいた。とそこへ数百人の兵士がやって来た。一足遅い到着だった。ミルキーが今あった出来事を説明していた。後で聞いた話だが魔族は一人、一人が一騎当千の強王者ぞろいだったとのこと。魔族はこのアルド大陸の西の上半分を支配下においているとのこと。

～つづく～

13話

ここはループ国の東に位置する円形のコロシウム。満員の観客が歓声や野次を飛ばす。国王のループ王やセブラス王子も貴賓席にてシュナイダー達に警護されながら座っていた。今は第一回戦の一試合目が行われていた。戦っているのは和明と全身に黒い鎧を纏った騎士ナートだ。騎士は回し蹴りを繰り出した。バックステップでかわす和明。ナートは胸から魔魂を引き抜いた。Uの字に曲がった剣だった。しかも二本ある。和明はスピードで圧倒する。ナートの振るう剣は和明に掠りもしなかった。和明は剣でナートの両手を鎧ごと切った。

「グワ！」

悲鳴をあげたナートは二本の剣を落とした。ナートは首元に突き付けられた剣を見て両手を挙げ

「参った。降参だ」

勝敗は決した。観衆から歓声があがる。和明は観客に手を振って応えその場をあとにした。和明はドアノブを回し控室に入った。小綺麗に整理された四畳程の小さな部屋だ。すると二人の人物が椅子から立ち上がった。ルナとミルキーだ。

「……おめでとう」

「和明、よくやったわ。この調子で優勝して、金貨千枚いただきよ」

「そうだな、優勝して美味しい物を食いに行こうぜ」

和明は一回戦を勝利で飾れてホッとしていた。和明は椅子に腰掛け水差しからグラスに水を注いで一気に飲み干す。それから三人は観戦に出向いた。空いていた観客席に座る和明達。コロシアムの中心では鞭を振るう女と顔をフードで覆った人物が肉薄した戦いを繰り広げていた。鞭が前後左右から襲うがフードの奴はギリギリのところでかわしながら女との間合いをつめていく。そして女の後ろに回り込み女の後ろ首をチョップした。昏倒する女は地面に倒れた。観衆達が「ワー！」と盛り上がる。倒れた女は二人の騎士が抱えて運び去った。ルナが

「……フード強い」

それに和明が答える。

「確かに余裕が感じられたな。まるで手加減してるみたいだったし」

ミルキーは

「和明、死んでも勝つのよ。ご馳走を期待してるんだからね」

和明はため息をつきながら

「俺、控室に行ってるわ」

そう言うのと歩きだした。

{つづく}

14話

和明が一人控室で瞑想しているとドアがノックされた。

「和明さん、第二回戦が始まります。おいでください」

「ああ、わかった」

和明は立ち上がるとコロシアムのフィールドに向かった。通路を歩いていると担架に切り傷だらけの男が乗って運ばれてきた。その男は苦しそうに「グク」と唸っていた。

コロシアムの中心には鼻が高く美しい顔立ちの男が立っていた。その男は観客席に投げキッスを送っていた。すると観客の女達が奇声をあげ喜んだ。その男に向き合う和明。とそこへ審判がやって来て言った。

「第二回戦の第一試合を行う。セクール対和明。試合開始！」

審判は小走りで二人から距離をとった。セクールは観客に視線をやりながら喋った。

「僕は人を傷つけるのは好きじゃないんだ。潔く降参してくれたまえ……カズカキ君」

和明はムツとして言い返した。

「そっちこそ、俺に負けましたって言えよ！ セクハラ野郎！」

セクールの眉間に怒りのマークが現れた。

「今なんと言ったかね」

「何度でも言ってやる！ セクハラ野郎！」

セクールはそれを聞くと形相を鬼のように変え和明に接近してきた。

「僕は紳士だ！ セクハラ等行うものか！」

そして右手をピストルの形にした。すると人差し指から十センチメートル程の火の玉が和明に向け発射された。和明は間一髪のところで魔魂を出し防ぐ。セクールは和明の周りをぐるぐる走りながら次々に両手から炎弾を放つ。和明は火の玉をかわしながら徐々にセクールとの距離をつめていく。

「セクハラ野郎、お前魔法使いだったんだな」

「だとしたらなんだと言うんだい」

ついに和明の間合いに入った。和明は剣のはらでセクールの頭をしびき気絶させようとした。するとセクールは胸元から金属性の棒を取り出し発現させ剣を受け止める。和明は上段から切り下ろした。棒で受け止めるセクール。その隙に和明はセクールの背後をとった。セクールは言った。

「伸びろ！」

セクールの棒が伸び和明の剣撃を止める。

「便利な棒だな、セクハラ野郎！」

セクールは和明に向き直り棒で三度突いてきた。全て避ける和明は魔力を両手に集めた。赤く発光する和明の手。和明は右上から袈裟切りを行った。棒で防ごうとしたセクールだったが強化魔法の一撃のためその棒が両断された。セクールは意識が途切れバタリと倒れた。魔魂は魂の一部であるため壊されると精神的にも肉体的にもダメージを受ける。セクールの棒がカランカランと音をさせ転がった。土煙りが僅かに舞い上がる。

{}つづく{}

15話

剣がぶつかり合う音が響くコロシウム内。和明はシードで出場していたシュナイダーと交戦していた。和明の衣服には所々裂け血が赤く滲んでいた。和明が苦戦を強いられるのには訳があった。シュナイダーの魔魂は振るうと刀身が透明になり見えないのだ。シュナイダーがぼつの字に剣で切りかかる。和明は段々シュナイダーの腕の動きだけで剣の位置を把握し始めていた。しかし歴戦の猛者であるシュナイダーは強かった。

「くっ！」

和明はシュナイダーの剣の威力に圧されていた。シュナイダーが右から左に切り付けた。後ろに跳んでかわす和明。和明は徐々にバトルフィールドの隅に追いやられる。このフィールドから出ても敗北になってしまう。和明の額から汗が流れる。和明はシュナイダーが剣を振りかぶった瞬間に両足に魔力を集中し勢いよく跳躍した。シュナイダーが和明の方に振り返る前に和明は跳躍しながら剣の腹でシュナイダーの背中をおもいきりしばいた。するとシュナイダーが体勢をくずされの片足がフィールド外に出た。審判かが二人の傍に駆け寄ってきて言った。

「勝者和明！」

円形の観客席から歓声があがる。シュナイダーは魔魂をしまうと笑顔で和明に握手を求めてきた。

「和明さん、楽しい勝負だった。ありがとう」

「こちらこそどうも」

和明はハニカミながら右手でシュナイダーの手を握った。とそこへフードを被った人物が通路から姿を現し寄ってきた。そして龍の柄が持ち手にあしらわれた槍を胸元から引き出した――

シュナイダーは和明に飛び掛かり押し倒した。シュナイダーの背中から血しぶきがあがる。シュナイダーは「ウグ」と言うのと仰向けに横たわった。フードの人物は第二撃目を放ってきた。和明はシュナイダーの傍に立ち槍を受け止める。フードの男は「ククク」と笑うと顔を覆っていたフードを脱いだ。そこには真っ赤な肌をした男が立っていた。和明は「ルーク!」と言うと槍を弾き返した。ルークは声高く言った。

「最高のパーティーをご披露しよう! 参加者はコロシウムにいる全員だ!」

{つづく}

16話

魔族のルークは槍を持っていない手で指を鳴らしながら喋った。

「我がしもべ達よ本性を顕せ！」

すると魔族を目にいれて騒ぎ逃げ惑う観客の内堂々と座っていた者達に変化し始めた。背中から黒い翼が生え顔は虎のように変わり手足が毛深くなった。まるで虎に羽を生やしたようなモンスター達だった。八匹いる。モンスター達は観客達を襲撃し始めた。兵士達が騒ぎを聞き付けコロシム内に入って来た。血を流し倒れ伏す観客。それらを助けようと各々魔魂を取り出し決闘する兵士達。ルークはその様子を楽しそうに見ながら言った。

「今日この国を手に入れる。邪魔だてする奴はなぶり殺す」

剣がルークの首筋を一線する。ルークは槍で止める。

「俺がそんなことはさせない！ 勝負だ！」

和明は言葉を荒げると細い剣で何度も突きを放つ。ルークは前後左右に体を動かし突きをさばく。

「和明！ 腕を上げたな」

ルークは嬉々とした表情を浮かべると槍を横なぎに払った。受け止める和明。ルークの怪力に吹っ飛ぶ和明。和明は慌てて地面から起き上がろうとする。しかしルークが槍の先で突いてきた。和明は地面を転がりながらかわす。立ち上がった和明は反撃に出る。二つ

の足と剣を握る手に魔力を集中しルークに突進し一撃を放った。ルークは槍で受け止める。僅かにルークの槍にひびが入るが弾かれた。ルークの背後からシュナイダーが上から下に切り付けた。シュナイダーの腕も赤く光っていた。強化魔法だろう。ルークは反転し槍でさばく。また槍に負担がかかりひびが酷くなる。シュナイダーと和明は強化した攻撃を繰り返した。シュナイダーの横切りに和明の左斜め上からの袈裟切り。防戦一方に回るルーク。ルークの頬を和明の剣が僅かに裂いた。青い血がスーと流血した。その血を見たルークは逆上した。ルークの槍先が燃えだした。そして両先に刃が顕れた。ルークは和明に突きを穿ちもう反対の先の刃でシュナイダーに切り下ろした。和明は剣の腹で受け止めシュナイダーは右に跳んで避けようとしたが腹を軽く切られた。うずくまるシュナイダー。和明は汗を流しながら残った最後の力を振り絞り右手に魔力を集約し渾身の一撃を放った。それを槍で阻止するルーク。幾度にもわたる攻防の末和明の剣は真ん中から折れ、ルークの槍も二つに割れた。和明は意識を失い石畳の上に倒れた。ルークは頭を抱え言った。

「人間等に魔魂を碎かれるとわ。和明を今のうちに殺しておかなければ魔族にとって災いになるやもしれん」

ルークは俯せに倒れた和明を碎かれた槍の半分で殺そうとするも魔魂を壊されたためふらついた。

「ククク。俺をここまで追い詰めるとわ。たいした人間だ……」

十

「ウワッ！」

和明は跳ね起きた。そこは白いベッドの上だった。

「ここわ？」 目を摩りながら眠そうなミルキーが話し出した。

「病院よ。和明、三日間も目を覚まさないんだもの、心配したわよ」

「そうか、ごめん」

ルナは丸椅子に座り上半身を和明のベッドに寄り掛かりらして眠っていた。和明は無意識にルナの頭を撫でた。

「ところでルークと魔物達はどくなったんだ？」

ミルキーは欠伸をしながら答えた。

「ルークわぁ逃げたわ。魔物達は私達や兵士達で倒したわ。安心した？」

和明はホッとした顔で

「ああ、もちろん」

{つづく}

17話

和明は眠っていた。ここわ宿屋。病院から退院して二日経っていた。和明はふかふかのベットでフニユとする軟らかい物を右手で握った。何とも言えない気持ち良さだ。するとミルキーが悲鳴をあげ和明の頭を平手打ちした。

「ギャー！ 変態！ なんてことするのよ！ それになんでルナちゃんのをベットに和明がいるのよ！」

和明とルナはミルキーの大声で目を開いた。和明は

「俺とルナはいつも一緒に寝てるんだ。お前こそなんでこのベットで寝てるんだよ？」

「わ、私はかわいいルナちゃんが和明の毒牙にかかったらいけないと思って一緒に寝てたのよ。それより人の胸を揉んどいて謝りもしないの？」

「え？ 胸？ 二の腕の間違いじゃないのか？ 小さかったぞ」

ミルキーは和明の脳天にチョップをかました。

「痛い！」

「キー！ 私の胸は標準サイズよ。これ以上大きくても邪魔なだけよ。いいから謝りなさいよ」

「悪かったよ。ゴメン。二度としないよ」

ルナは自分の小振りな成長途中の胸を服ごしに凝視して言った。

「……前途有望！
……だよね」

和明とミルキーはお互い一人で寝るように言い争うもルナが和明と寝るといふのでしかたなく三人で寝る事になった。三日後、和明は就寝中に無意識にミルキーのほんわりとした柔らかさのお尻を触った。またしてもミルキーにしばかれ、顔に飛び蹴りを食らわされる和明なのでした。

つづく

18話

「ほんとにこんな山なんか魔魂の真髓を知る仙人が居るのか？」

温もりのある陽光がさしつける中和明達一行は山道を登っていた。ここはサンザス山。人を寄せ付けぬ雰囲気を醸しだした場所だった。ミルキーは摘んだピンクの花の臭いを嗅ぎながら弾んだ声で答えた。

「噂では山の中で一人暮らしをしてるらしいわよ」

獣道を歩く三人の前にふたまわり程大きな狼が藪から現れた。その狼は「ウー！」と毛を逆立てながら威嚇してくる。牙がとても大きくて鋭い。魔魂を取り出し臨戦体勢に入る和明達。

「これこれ止めるんじゃないーニ」

声の方を見る一同。その生い茂った草を掻き分け頭髮が一本も無い皺だらけの顔のおじいさんが歩いて姿を見せた。巨大な狼はその老人を見ると笑顔になり老人の側に走り寄り寝転び腹を見せた。狼は先程の形相は微塵もなく「ハッハッ」と楽しそうに声を発した。その狼の腹を腰を少し曲げ摩る老人は言った。

「おまえさん達は何故こんな山奥に来たんじゃ？」

「えーと――」

「待て、わしがあててやろう……そうじゃ、超絶美男子であるわたしを拝みにきたんじゃないろう！ え、そうじゃろう！」

和明は戸惑いながら

「いや――」

「違うのか！ ガビーン！ じゃあ魔魂の極みは教えてやんない！」

「え、魔魂の極み！？ お前……いや、あなたが仙人なんですか？」

老人は狼の額を右手でかきながら喋った。

「仙人……佐用、わしミラドが仙人じゃ。ついてきなさい」

和明達は老人と狼に似た獣の数歩後を追尾していく。好き放題生えた草を払いのけ木々をかわしながら進んでいく。しばらく歩くと開けた場所にある小屋の前に来た。狼にそっくりな獣は走り去った。ミラドは小屋の前にある竹の椅子に腰掛けると言った。

「お前達の目的は魔魂の真髓を極めるためじゃな？ つまり魔魂の真髓解魂をマスターすること」

和明達が頷くと老人は言った。

「わしの魔魂は特殊な錠剤なのじゃほれ」

ミラドは右手で胸元から三粒の白い葉のようなものを取り出した。

「一人一錠の飲むのじゃ。そしたらあちらの世界で魔物か……」

ミラドは和明を一瞥した。

「……あるいは自分自身と戦い勝つのじゃ」

錠剤を受け取った三人はそれぞれコップに入った水で飲み干した。次々に意識を失い倒れる和明達。

+

「うう、ここわ？」

和明が立ち上がるとそこは広く白い空間だった。和明の数メートル先にはもう一人の和明がスマイルで立っていた。和明は

「また、お前か」

「そうだよ、久しぶりだね」

「また戦うのか？」

「そうだよ」

そう言うやいなやもう一人の和明は一瞬で和明の背後に姿を現した。和明は魔魂を出し振り返るが右腕を軽く切られた。和明は「ウグ」と唸りながら走り相手との距離をとった。

「無駄だよ」

また、不意に和明の前にもう一人の和明が姿を見せた。和明の腹に剣の先を軽く当てて。もう一人の和明も右腕から出血していた。和明は

「瞬間移動か？」

「そう、まさに。君が秘めた魔魂の真髄だよ。しかも剣の強度も格段に上がる。剣も柄が黒だしね」

「どうやったら、そうなれる？」

「考えるんじゃない感じるんだ。意識を無にしてとぶんだ」

和明は集中力を上げ目を閉じ、また開いた。和明は元居た場所から数百メートル先にいた。しかも細い剣も黒に染まっていた。

「出来た！」

「調子が良いね。僕に一撃でも入れたら君の勝ちだ……」

和明は相手のこちらから見て右側に姿を出現させ相手から見て右から左に切る。反射的に剣をぶつけるもう一人の和明、彼は和明の後方上に瞬間移動し縦に切り掛かった。和明は相手の後方にとび左斜め上からの袈裟切りを放つ。もう一人の和明は十メートル程和明から距離をとった。和明は相手の正面に姿を現し横切りをする。もう一人の和明が黒い剣で防ぐも右頬を負傷した。もう一人の和明は言った。

「参ったよ。僕の負けだ」

それを聞いた和明は意識が混濁して倒れた。

{つづく}

19話

和明は目を開いた。そこは鬱蒼と木々が周りに生い茂る小屋の前だった。ルナとミルキーの声がした。

「……和明、心配した」

「なんでそんなに遅いのよ。魔魂のセンスがないのかしら」

どうやら聞いた話によると和明だけ一時間も意識が無かったらしい。ルナ達は解魂を身につけ魔物を倒し十分ぐらいで目を覚ましたらしい。和明がもう一人の自分と戦っていたと話すとルナ達は奇異の目を和明に向けた。ミルキーは

「ミラドさん、もう一人の自分ってどういうこと？」

ミラドは「ホッホッホッ」と微笑すると語り出した。

「この世界には伝説があるのじゃ。アルド大陸が魔族の危機にひんした時、東の扉より漆黒の髪勇者が現れ自分自身を倒し魔魂の力を持って魔族を制し世界に平和と調和をもたらす……そして西の門より姿を消すと」

ミルキーは思案げな顔をした。

「つまり和明は正義の勇者なの？ 確かに髪の色は余りいない黒だけれど」

「わしはそうじゃと思う。一目見た時から異質な雰囲気を感じたし

の」

ルナは興奮した顔で和明に訴えた。

「……私の解魂凄——」

「ガルル！」という怒気を孕んだ声音が林からこだました。木々から鳥達が一斉に空へと逃げ去る。シュルシュルと音がして姿を現したのは身の丈三メートルはある巨体を誇る蛇のようなモンスターだった。ミラドが椅子から立ち指笛を吹いた。すると奔走する足音が聞こえた。そしてミラドのペットのルーニーが姿を見せた。

「わしは魔魂が特殊で戦えん。そなた達に任せてもいいじゃろうか？」

「ああ、じいさん任せとけ」

ルナが一番早く魔魂を取り出しモンスターに突撃した。

「……解魂」

ルナは魔物から数メートル離れた所から縦に切り付けた。するとルナの大剣は長さが十メートル剣幅が一メートルのどでかい剣になった。モンスターは断末魔な声をあげながら一刀両断され絶命した。ルナは褒めてほしそうな顔で

「……和明、どう？」

「すごいぞルナ！ でも重くないのか？」

「……軽い」

ルナは満足気な顔で剣を元のサイズに戻し胸にしまった。和明は尋ねた。

「ミルキーの解魂はどんなの？」

ミルキーは「ふふふ」と笑うと

「私の解魂は一言で言うなら雷よ。私がハンマーで打ったものには高圧電流が流れるの」

「へー、雷か。それは良いな」

「和明の解魂はどんなのよ？」

「瞬間移動だよ」

ルナが幼い顔で和明を見上げながら

「……カッコイイ」

「瞬間移動か……便利ね」

ミラドは言った。

「日が暮れると凶暴なモンスターが現れる。早く帰った方がいいじやろう」

「わかった。ありがとうなじいさん」

20話

ここはループ国の商店街。見たことのない外観の野菜を売る八百屋や日本ではお目にかかれない異様な様々な魚を威勢よくうる魚屋等が軒を連ねる。主に主婦達が店先で品物を手に取り質を見比べたり購入したりしている。和明とルナはパンニ（見た目はイチゴで味わいはチョコレート）を口に運びながら商店を見物していく。今回はミルキーが宿屋の調理場を借りて手料理をご馳走してくれることになり材料を調達に来たのだ。真剣で険しい表情のミルキーは商品を品定めしていく。そんな時商店街の先にある公園からけたたましい喧騒が聞こえて来た。和明達は視線をかわし頷くと公園に向かい走り出した。

十

両手斧を右手に提げた男を魔族のルークが槍で腹を貫いていた。血が濁流のように地面に流れる。ルークの周りには老若男女の人々が流血し倒れ伏していた。「ウウ」と呻く者も居ればピクリともしない人もいた。ルークの隣に立つ赤い肌の魔族は言った。

「下級魔族のルークよ。今回こそはこの弱小国を我らが手中におさめようぞ」

ルークは目を細め槍を引き抜きながら震える声音で言った。

「はい、ブードゥー様」

二人の魔族の周囲を騒ぎを聞き付けた数千人の兵士達が魔魂を持

ち囲む。剣を持った四人の兵士がルークに切り掛かった。ルークは

「解魂」

槍は伸び四人の兵士を横切りにした。倒れる兵士達。ルークは槍を伸縮させながら兵士達を斬り伏していく。次々にルークは兵士達をなぶっていく。一人また一人と倒れ動かなくなる兵士達。それを見て兵士達の士気が下がって戦いをしなくなり悲鳴を上げ逃げ出す始末。指揮官と思われる立派な鎧を着た兵士は怒声を上げた。

「兵士達よ！ 逃げずに戦え！」

ルークは総崩れになり散り散りになる兵士の群れを横目に喋った。

「指揮官よ、貴様が戦えばいいではないか？」

「ひい！」

指揮官とおぼしき人物はルークの前から逃げ出した。ルークは駆け指揮官の首をはねた。血しぶきをあげ倒れる死体。ブードゥーはにこやかに言った。

「北にある国はここループ以外我等の支配下にある。ベリンは一週間前にラバタは二日前に陥落した。ルークよそなたは二度も失敗した。次はないものと思え」

ルークは冷や汗を額から垂らしながら「はい、ブードゥー様」と返答した。ルークが城を目指し歩き始めたその後ろをブードゥーが行く。公園を出て真っ直ぐに進む。そこで和明達と出くわしたルークは言った。

「和明か、最後の勝負だ。来い！」

和明は剣を両手で握ると駆け出した。ルークの槍とぶつかり激しい金属音がした。和明は斬撃を繰り返す。槍で阻止するルーク。和明の類い稀なスピードに押されだすルーク。ルークの体に切り傷が増えていく。ルークは距離をとった和明に槍先を向け言った。

「解魂」

槍が伸びるが和明の残像を貫いただけだった。和明の跳んだ先に伸ばした槍で切る。しかし当たらない。和明は

「解魂」

姿を消す和明。反応出来なかったルークの首元に冷たい感触がした。ルークは頭だけ後ろに回す。和明が剣を首に当てていた。

「ルーク、退くんだ。そうするなら命だけはとらない」

ルークは「ククク」と笑うと言った。

「俺は退かない。首をはねな」

「終わりだな」

ブードゥーはそう言う右手でルークの鎧を貫き胸をえぐった。「ブシュ」という音がして青い血が辺りに飛び散る。返り血を浴びたブードゥーはルークから右手を抜いた。倒れるルークは血を吐くとうずくまり呻いた。和明達は驚きを顔に出していた。ルークは目

をカッと見開くと静止した。ルークは同族の手にかかり命を落とした。ブードゥーは言った。

「和明とやら、見事な腕前だ……わしはブードゥー、ラバタの統治をしている。ラバタに来たなら戦おうぞ」

そう喋るとブードゥーは身を回転させ姿を消した。死体の山を残して。

つつく

21話

酒場のテーブルを和明達が囲んで丸椅子に腰掛け話こんでいた。辺りからは酔っ払い達の喧騒がする。皆楽しそうにワイワイ騒いでいる。

「ベリンとラバタに救援に行くべきだ」

そう言うと和明は大ジョッキに入った黄色く泡立ったルービ（ビールみたいなアルコール飲料）を二口がぶがぶと飲んだ。ミルキーは思案気な顔で言った。

「私達三人が行っただけで救えるかしら？」

ルナもルービをちょびちょびやりながら

「……魔族が何人いるかわからない」

和明は腕を組み目をつぶり逡巡すると

「それならルーブラ王に直訴して軍隊を出してもらおう」

「うまくいくかしら？」

「……不安」

「駄目元でやってみようぜ」

和明達は城門前の兵士づてに翌日の朝、王と謁見することの許しを得た。和明達は宿屋のベットに入った。もちろん三人一緒のベット（二つのベットをくっつけている）だ。ミルクィがヒステリー気味な声で言った。

「和明、昨日私のふとももを触ったでしょう！」

「誤解だ！ 俺はなにもしてない！」

ミルクィは和明の両頬を引っ張った。

「イタタ！ やへろ Milf ァー！」

髪をゴムで後ろに纏めたルナが仲裁に入った。

「……ミルクィ、和明わざとじゃないと思うよ」

ルナの話しを聞くと渋々ミルクィは和明を解放した。ミルクィは

「ルナちゃんがそう言うなら許してあげるわ。和明良かったわね。ルナちゃん昨日はどんな夢を見たの？」

「……パンニ（苺の外見でチョコレート味）で出来た山を登ったの。パンニを百っ個は食べた」

「ルナちゃんかわいい！ はあはあ！」

ミルクィが強くルナを抱きしめた。和明はやれやれといった顔で

「明日謁見があるからランプの火を消すぞ」

三人は一人また一人と夢の世界へ旅だつていった。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{う} \\ \text{づ} \\ \text{く} \end{array} \right\}$$

22話

「では軍隊を貸して欲しいというのだな」

壮年のルーブラ王は金色の椅子にもたれ掛かり顎髭を摩りながら言った。ここは大きなシャンデリアが天井を華やかにし獣の皮の絨毯が幾つも敷かれている埃一つない謁見の間。大臣や騎士のシュナイダーが玉座の二段下の脇にたって和明達を注視している。和明は熱弁した。

「そうです。ルーブラ王はとても勇敢で慈悲深いお方。ラバタ国やベリン国の民が魔族に苦しめられるのは見ていたくないでしょう。ルーブラ王は本当は自身の手で魔族をラバタ国等から追い出したいはず……」

ルーブラ王は満更ではない顔で「うんうん」とうなづき言った。「よしわかった。和明よ、そなたの武勇は存じておる。一万の兵を預けよう。二つの国を救って参……」

とそこで浴衣のような服を着た大臣が王の前に進み出た。

「我が君、それはなりません。我が国に魔族が攻めてきたらいかをするのです？」

王は不満げな顔で言い放った。

「大臣よ。わしは決めたのだ。邪魔だてする気か？」

大臣は王の顔を見て冷や汗を流しながら

「いえ、なんでもありません……」

そう言うとスゴスゴと下がった。王は椅子より立ち上がり玉座に立てかけてあった宝石をあしらった素晴らしい剣を和明の前に差し出した。

「そなたにこの剣を与える。そなたの言う事はわしの言うことぞ。逆らう者は処罰を与える」

和明は王に歩み寄り宝剣を受け取った。剣を鞘から少し引き抜き刀身を観察ししまった。和明達はお礼を述べると謁見の間を去って行った。

つづく

23話

ここはラバタ国の城壁前。分厚く高い石壁が侵入を拒んでいる。城門前で睨み合う二つの勢力。和明達の軍とブードゥー率いる軍隊だ。和明達とブードゥー以外は鎧兜を着込み魔魂を手にしている。和明は馬上から大きな声を上げた。

「そっちの大将は誰だ！？ 一騎打ちをしようぜ」

その声を聞きブードゥーの軍が左右に開いた。そして黒い馬に乗ったブードゥーが姿を現し言った。ブードゥーは赤い髪を腰辺りまで伸ばし切れ長な紺色の目で顔には切り傷が散見でき黒いローブのような服を着ている。

「よかろう、その勝負買ったぞ」

和明とブードゥーは馬から降り平野を歩き二人が近づく。和明は胸元から魔魂を引き抜いた。二人は駆けた。和明の渾身の横切りをブードゥーは右手で防いだ。金属音が響く。ブードゥーは

「わしの魔魂は粒子だ。両手を剣のようにコーティングしてくれる」

ブードゥーが両手を振るう。和明は避けたが髪を少し切り落とされた。和明は突きを放つ。しかしブードゥーは右手で剣を掴んだ。ブードゥーは剣を掴んだまま左手で縦に手を動かした。和明の頭部に一直線に向かう。和明は

「解魂」

瞬間移動する和明はブードゥーの背後に周りブードゥーの首に斬撃を繰り出した。ブードゥーは慌てふためき言った。

「解魂！」

和明の剣は「ギィン」という音がして弾かれた。ブードゥーはニヤニヤ笑いながら

「わしの解魂は無敵だ。全身をコーティングし金属の強度にしてくれる。勝負はあったな和明よ」

しかし和明はめげずに瞬間移動する。そして魔力を両手に集中しブードゥーの後ろ首に切り付けた。僅かに食い込むも少量の血が出ただけだ。ブードゥーは余裕の顔で佇み言った。

「和明よ。降伏するのだ。お前は強い、重用してやろうぞ」

和明は全身の魔力を右手に集めブードゥーの後ろの首に切り掛かった。今度はブードゥーの首に深く切り込んだ。和明の衣服がかえり血で青く染まる。ブードゥーは血を流しながら膝を付いた。

「ウググ……まさかわしの解魂が敗れるとわ……グハッ！」

ブードゥーは血を口から垂らすと地面に横たわり動かなくなった。和明の勝利を見た兵士達は鬨の声を上げた。ブードゥーの軍も魔族から解放された事を喜んでいようだ。その後ラバタ国は牢屋に閉じ込められていた王を自由にし元の状態に戻り始めた。

$\{\sim, \cup, \cap\}$

24話

ここはベリンという城塞都市があった場所。和明達パーティーと付き従う一万の兵士は草の絨毯が広がる草原から空を見上げていた。何故ならベリン国は上空数百メートルの高所に存在したからだ。ベリンの元あった所は地面がクレーターのようになっている。和明は

「多分、魔族の仕業だ。潜入するため瞬間移動するからルナとミルキー俺に掴まれ」

ルナ達が和明の両腕を握った。和明は黒い細い剣を握り意識を集めていく。しかし草原の草が揺らめいただけで変化がない。とそこへ馬に跨がった赤いローブを着た白髪混じりで恰幅がいいお婆さんが近づいて来て言った。

「お若いが無駄じゃよ」

和明は目を見開いて尋ねた。

「何故駄目なんだ？」

お婆あさんはベリンを指差し

「あの都市の周りに薄い膜のようなものが見えるじゃろう……シールドが張られておるのじゃ」

和明達と近くで聞いていた兵士達が空高く舞い上がった都市を凝視する。確かに薄い何かが存在していた。和明は答えを知りたくて聞いた。

「じゃあどうすればあの都市に侵入できるんだ？」

おばあさんは「ホホホ」と笑うと教授してくれた。

「方法はのう……ハムスの洞窟にあると言われている……『破呪』という魔法じゃ。その呪文ならあのシールドを破れるじゃろうて」
ミルキーは風邪気味でくしゃみをしながら尋ねた。

「ヘブシ！ おばあさんは何故そんなことを知っているの？」

おばあさんは小首を傾げると言った。

「はて、なぜじゃろうのう、ハムスの洞窟はここより西に向かった所にある。ご武運を祈っておるぞ」

和明達はおばあさんにお礼を言い兵士達をベリンの一キロメートル西に駐屯させるとハムスの洞窟を目指し草が膝まである草原を駆け始めた。

{}つづく{}

25話

「このモンスターわらわらいるな」

和明が剣を振るい、やかんのようなモンスター達を討伐していた。ミルキーもルナも応戦しているが敵の数が多い。しかしやかんのようなモンスターは口から水を和明達にかけるだけなので無害ではある。ここはハムスの洞窟。発光する虫ルブルがわんさかいるため洞窟といえど明るい。

「とおりゃー！」

和明が最後のやかん型モンスターを退治した。皆安堵の溜息をつき階段を下った。壁や階段には湿気で苔のようなものが生えている。地下一階には裸エプロン姿の和明達がいた。偽ミルキーは妖艶でセクシーだった。偽ルナは可愛かった。しかし偽和明は不気味としか言いようがない。偽和明を見たルナとミルキーはえづいた。和明は悲愴な声で

「そんなに気持ち悪いか？」

青い顔をしてうなづくルナとミルキー。ルブルが一匹和明達の前を飛んだ。和明は偽ミルキーを下心を孕んだ目で刮目している。ミルキーは照れた顔で言った。

「いやらしい目でみるな！ てい！」

和明はミルキーからビンタをくらいルナに足を踏まれた。偽和明達は手に斧を持ち襲い掛かってきた。和明達は慌てて魔魂を取り出

し切り結ぶ。ルナが偽和明の腹を切り裂き真っ二つにした。和明のエプロンが落ち和明の下半身があらわになる。標準サイズより小さかった。ルナは頬を染め顔を背けた。ミルキーは「小さい！ アハハ」と言っていた。少し時間が経つと偽和明の死体は泥に変わった。和明は偽ミルキーのエプロンだけ切ろうとあくせくしていた。和明は

「偽、動くな！ エプロンだけ切れないじゃないか！」

ミルキーは偽ルナをハンマーでしばいて倒し、ルナが偽ミルキーを頭から両断した。和明は嘆いた。

「ああ！ 見えなかったじゃないか！」

ルナは軽蔑した目で

「……変態」

和明達三人は辺りを探索し階段を見つけ一步一步慎重に下っていった。

｝つづく｝

26話

ここはハムス洞窟の地下二階。光る小さな昆虫ルブルが何匹も飛行している。和明達は戦っていた。相手は頭から両断された右半身と左半身の人型のモンスターで海賊のような身なりをしている。名前はミルキーいわくシャドーアークと言うらしい。右半身のシャドーアークがルナに切り掛かった。ルナは相手の勢いを逃がし返し刃で右半身の首をはねた。大量に赤い血を流しながら倒れる右半身。左半身もミルキーの会心の一撃で没した。和明達は地下三階に向かった。階段を下りた真正面には下へ降りる階段があり左手には赤く光り小さな輝く泉があった。赤い泉の前には立て札があり『この水を飲めば破呪を体得できる』と書かれていた。和明達は各々恐る恐る手で水をすくった。ミルキーは

「和明！ あなた男でしょ、先に飲みなさいよ！」

和明は「えー」と言いながら少しずつ飲んだ。腹痛も頭痛も何も起きなかった。それを見てルナとミルキーも飲んだ。

「グワー、苦しい！ 助けてくれ！」

和明が呻き出したのを見てルナとミルキーは赤い水を噴き出した。ミルキーは言った。

「ちよっと和明大丈夫!？」

和明は倒れ腹を押さえていたが立ち上がり

「なーんてね」

「からかったのね！」

「……心配して損した」

和明達は赤い水を飲み呪文を試した。和明は右手を泉に向けると唱えた。

「破呪」

和明の手の平から赤い光が飛び出し泉の中へ入っていった。ミルキーとルナも実践した。和明達一行は今来た道に戻って行った。障害になる罘やモンスターは全く無かった。

～つづく～

27話

「よし、早速破呪を試そうぜ」

ここは元ベリンの前。和明は右の手の平を空高く舞い上がった都市ベリンに向け言った。

「破呪」

赤い光がベリンを覆う膜に直撃した。しかし膜は無くならなかった。和明はルナとミルキーに同時に破呪をやるように頼んだ。三人は六本の腕をかがげ言った。

「「破呪」」

六個の光が飛んでいく。そしてベリンの膜にヒットした。「ブーン」という音がしたかと思うと膜は消え去った。和明達と兵士達は喜んだ。和明は魔魂を取り出し

「解魂」

ルナとミルキーが和明の肩に触れる。和明は意識を集中しそして姿を消した。兵士達には待機を命じておいた。

+

「フンフン、ルンルン」

その豪華な個室で貴族らしい女が裸になって鏡の前でドレスに着

替えようとしていた。その部屋に和明達は姿を現した。和明を見た女は服で体を隠し悲鳴を上げた。慌てて入って来た兵士二人を剣の腹で強打し気絶させた和明。三人はその部屋を出ると赤い肌をした魔族を探し始めた。廊下を疾駆する和明達は近くの扉を片っ端から開いていく。しかし魔族はなかなか見つからない。十個目の扉を開けると人ではなく全身が骨で出来たモンスターが三体いた。和明は魔魂で横切りを放ちルナは縦切り、ミルキーはハンマーで強打した。圧勝だった。それからその豪華な部屋を出て次の扉を開けるとそこは瀟洒な謁見の間。石造りの部屋で壁は青い布で覆われている。玉座には赤い肌を持った男がほうづえをつきながら座っていた。赤い肌の男は鼻が高く目は大きく立派な服を着ていた。魔族は言った。

「わっちはルシース。この国の王なりる。勝負だる」

ルシースはそう言うのと豪華な椅子から立ち上がり四本の手で胸から魔魂を取り出した。剣だった。和明達も魔魂を発現させ突っ込んだ。和明は真っすぐにミルキーは相手の右側からルナは左側からだった。金属音が室内に響いた。何合も打ち合う両者。お互い一步も譲らない。ルシースは奥の手を出した。

「解魂」

ルシースの胸元から剣が飛び出した。自動で動く剣のようだ。その剣は和明を襲った。和明は受け止める。ルナが解魂し長さ十メートル幅が一メートルはある剣で切り付けた。五本の剣で防ぐルシース。ルシースの足元が少し壊れた。次にミルキーが解魂しルシースの腹をハンマーでしばいた。ルシースの体を高圧電流が流れる。痺れて動けなくなったルシースの背中を和明がバツの字に切り裂く。ルシースは「グワー！」と叫ぶと平伏した。和明は息も絶え絶えなルシースに尋ねる。

「どうやったら、地上にこの都市を戻せる？」

ルシースは消え入る声で

「わっちが死ねば戻る……さらば……だ……」

和明達はその後ベリンからループに兵士を連れ凱旋した。そしてループで盛大なパーティーが催された。

〜つづく〜

28話

「すげー、木に本が実ってる」

ここはループ国の南にあるタイザ国領の北東に位置する通称本の森である。この森には生い茂った木々から本が生えている。ギルドの依頼によりこの森に巣くう赤とピンクの生きた魔本の生け捕りに来たのだ。和明達はギルドのランクをCにあげていて今回の一件が成功するとランクをBに上げることになる。和明達一行は藪を掻き分け木立を避け森をどんどん進んで行く。木の幹に剣で丸印を書き目印を付けるのにも抜かりが無い。和明は自身の胸元まで伸びた深緑色の草を切り捌きながら一步一步前進していく。すると頁を閉じた赤い本が空中を飛来して来た。ミルキーが指差し言った。

「和明、ルナちゃん、赤い魔本よ」

ルナとミルキーも魔魂を取り出す。赤い魔本は危機を感じたのかピクピクと震えると「バサッ」とページを開いた。赤い本が赤く発光したかとおもうと直径一メートルはある火の玉が和明目指して飛んだ。和明は解魂し魔本の後ろに瞬間移動した。火の玉は大木にヒットした。そしてその木が「バキバキ」と倒れた。和明は生きた本の背後から本を掴もうと表紙に触れた。

「熱う！」

和明は火傷しかかった左手を振って左の耳たぶを触った。魔本は和明の方を向くとまた光り小さな火をマシンガンのように発射した。和明はワープしてかわす。とそこへミルキーが強化魔法を使い凄まじいスピードで疾駆し魔本に解魂したハンマーを振り下ろした。直

撃した魔本は地面に転がり「ビリビリ」と雷を体に帯びた。どうやら痺れて動けないようだ。その隙に和明は背負っていたリュックサックから紐をだし赤い魔本を開かないようきつく縛りリュックサックに入れた。

〜
つづく
〜

29話

赤い魔本を生け捕りにした後一時間森をさ迷った。ピンクの魔本が見つからないのだ。ルナが回り込み青い生きた魔本を一刀両断した。ルナは苛々した口調で

「……ピンク色無い」

ミルキーがルナを宥める。

「ルナちゃん、後少しの辛抱よ。きっともう少しで見つかるわ」

そんな話をしていたら和明達の頭上から桃色の書籍が姿を見せ下りて来た。和明は有頂天になって言った。

「よし！ ついに見つけたぜ。皆どんな魔法を使うか分からないから注意するんだ」

現れた魔本が二つに開けピンク色に発行し左右に揺れ動くと思いつルルが沢山ついたメイド服を着た和明が出現した。絶句する和明と静観するルナとミルキー。偽和明は

「見せまーす！」

そしてスカートの先を持ち上げ誰も喜ばないパンチラを披露した。赤いショーツを履いていた。ルナは気持ち悪いのか目を背けた。ミルキーは「ウゲー」と喚いた。一陣の強い風が凧いだ。偽和明の攻撃力は益々アップしていく。

「脱ぎまゝす！」

偽和明は背中に両手を回しチャックを下ろしていく。そしてメイド服を脱ぐと上下赤い下着の姿になった。ブラのホックをのけパンツ一枚になった。そして赤いパンツを――

「ていやー！」

和明は瞬間移動で魔本の正面に姿を現し剣の腹でピンク色の本を何度もしばいた。魔本は気絶したのか動かなくなった。まにあったかと思った和明は背後から悲鳴を耳にした。

「……オエー！」

「気持ち悪いー！」

和明が振り返ると赤いパンツを右手に持つ偽和明のかくばった尻が見え、次の瞬間には消失した。野鳥が「ホーホー」と鳴いていた。魔本を獲得した和明達であったが一週間程蟠りが出来た。

{つづく}

30話

Bランクになった初めてのギルドの依頼はルーブ国の公園に夜な夜な現れる半裸にブリーフに似たパンツを履いた変質者の討伐もしくわ改心させる事だ。和明達は変質者と言えど人なので捕らえて改心させようと合議していた。閑散とした夜の公園は明かりは街灯のみで空のベンチが数個あるだけでどこか不気味だ。和明達はミルキーをベンチに座らせ変質者をおびき寄せようとしていた。和明とルナはミルキーが座るベンチ裏の藪で身を潜ませていた。十分、二十分と時間が流れていく。しかしターゲットは現れない。和明がミルキーに今日は遅いもう帰ろうと言おうと立ち上がった時異変が起きた。公園の入口に口笛を吹きルンルンとステップを刻みブリーフのような下着のみを履いた男が出没したのだ。その不審者はミルキーの前で足を止めるとパンツの中に手を突っ込みもう一枚のパンツを取り出した。茶色ばんでいる。ウンコのようなだ。ミルキーは「ヒー」と言うと言身を縮めた。変質者は「私はブリーツと言います」と名乗ると先ほど取り出した茶色く滲んだパンツをミルキーの眼前に差し出し言った。

「今日は寒いですからこれをお履きなさい」

ミルキーは恐れ戦きブリーツから距離をとった。そこでルナと和明が魔魂を持ち藪から出て来た。

〜つづく〜

31話

和明は威嚇するように喋った。

「プリーツ、こんな変態行為もう止めて真面目に生きるんだ！」

プリーツはそれを聞き憤って

「私は慈善事業をしているのです！ 変態とわ失礼きわまりない！ 勝負だ！」

プリーツは魔魂を取り出した。ウンコが付いたパンツだった。そのパンツを振り回し和明に攻撃してきた。プリーツは足を魔法で強化し駆け和明との間合いを一気に詰めたかと思うと油断していた和明の右頬にパンツのウンコがこびりついている部分が直撃した。和明は

「ギョエー！ ウンコ臭い！」

そして追い撃ちをかけるようにプリーツは「解魂」と言った。プリーツの周囲十メートル以内の空から茶色ばんだパンツが何千枚も降って来た。和明達一行はプリーツから距離をとった。ルナとミルキーはプリーツの変態ぶりに戦意を喪失していた。仕方なく和明が魔魂を持ち瞬間移動しようとした時事件が起きた。

「グワー！ 臭すぎるー……」

プリーツは自身が出現させた茶色ばんだパンツを顔にもろにくらい、臭さのあまり気を失ったのだ。パンツの雨が止んだのを確認し

た三人はプリーツの両手両足をロープで縛った。

「は！」

プリーツは十分後に目覚めた。自分のおかれてある立場を理解したようで大人しくしている。そんなプリーツに和明は説教をする。

「プリーツ、お前は三十を過ぎた大人だ。これからは変態行為は止めて紳士のように生きるんだ。いいか？」

プリーツは晴々とした顔になりこれからは衣服を着て生活することを約束した。プリーツを解放し数日後ギルドに和明達は行った。ギルド内には屈強な男達が椅子に腰掛けていた。男が多いので暑苦しい。和明達は受け付けに行きプリーツを改心させたので報奨金を貰おうとしたが拒まれた。受け付けの切れ長な目に青い瞳、肩まで伸びた金髪のグラマーな女性は言った。

「プリーツはまだブリーフ一丁でまた出沒しています。なのでお金は渡せません」

その後和明達一行はプリーツを五回捕らえ五度説教してようやく出現しなくなった。

～つづく～

32話

「見当たらないなあー」

和明達一行はパツガと呼ばれるモンスター討伐にルーブ国の南西にあるルー国のプーザ川に来ていた。清涼とした風が川の周りを吹き抜けている。広いプーザ川の川岸から辺りを探索する和明達。パツガはこの川から頻繁に姿を現し女達を襲うスケベなモンスターらしい。ギルドの受付のセクシーなお姉さんによるとパツガは女性用のパンティーが好物で目がないらしい。和明は

「よし」

と言うと鞆から道具屋で購入した伸縮する釣竿を取り出し糸を繋ぎミルキーに言った。

「パツガ釣り上げるからパンティー貸して」

ミルキーは身をよじると嫌悪した顔で

「え、嫌よ。あんたのパンツでいいじゃない」

和明はやれやれといった表情で言った。

「男物じゃパツガをおびき出せないって」

「まったく、仕方ないわね。あっちの方向いてて」

ミルキーはしょうがなく短いスカートをまくし上げピンク色のシ

ヨーツを脱ぎ和明に渡した。

〜つづく〜

33話

ミルキーから脱ぎたてのピンク色でフリルがついたパンティーを受け取った和明はそのパンツを親指と人差し指でつまみしげしげと眺め言った。

「サンキュー。それにしても可愛いパンツを履いてるんだな」

鼻の下を伸ばす和明にミルキーのチョップがとんできた。

「イタッ！」

「こら！ 人のパンツをジロジロ見ないでパッガを誘い出さないよ」

「はいはい」

和明は伸ばした釣竿の頑丈で太い糸の先にパンティーと重りを括り付けた。そしてルアー（パンティー）を川に投入する。待つ事一分、プカプカ川面に浮かぶ浮きが川の中に急激に沈んだ。ルナがテンションを上げて

「……かかった！」

和明は竿をぐいぐい引き寄せる。徐々に水中からモンスターが姿を見せ始めた。そのモンスターは人型で全身緑色の肌で背中にはこうらを背負い頭の上には皿があった。岸から上がったパッガはなぜか鉄製のダッチワイフをうだいていた。パッガはパンティーから口

を離した。そしてミルキーを見ながら「はあはあ」と荒い息をする。和明達は魔魂を取り出す。パツガはダッチワイフの両足を両手で握り振り回して攻撃してきた。ミルキーがハンマーで弾く。パツガは目標を変えルナにダッチワイフを振り下ろした。ルナは

「……変態」

と言うと解魂しダッチワイフの首を撥ねた。パツガはそれを見て大泣きし

「我が妻の首が！ 嫌だー！ パンティーは永遠に不滅なりー！
ぐはっ！」

パツガは蒼白な顔で倒れダッチワイフを切られた事でショック死した。和明が倒れたパツガの胸に耳を当てたが心音は聞こえなかった。

{つづく}

34話

ここはループ国の西隣りに位置するラバタ国の国立公園。そこには中心に円形の華麗な花畑があり蝶や蜂が飛行している。その外側を整備された道がありランニングしている人やベンチに腰掛け読書している者もいるし犬の散歩中の人もいる。道の外側には木々が植えられていて公園に影を作っている。今回の目的は変人の捕縛と引き渡しだ。この公園に度々出没するらしい。和明達は快晴のしたを歩きターゲットを探す。なんでも変人はビキニパンツを履いただけの恰好でうろついているらしい。

「キヤー！ 嫌ー！」

噂をすればなんとやら。悲鳴の出所には筋肉隆々で茶髪に青い瞳、かくばった顔のパンツ姿の男がいた。彼は手にいくつかのパンニ（苺の外見でチョコレート味）を持っていた。叫んだ女性は後ろ髪を揺らしながら走り去って行く。そのターゲットは和明に気付くと振り返りパンニを差し出し言った。

「僕はパンツーといいます。パンニは如何ですか？」

和明はびっくりしたが「え、ありがとう」と言うパンニを平らげた。なんか温くて変な臭いがした。しかしターゲットは親切そうで悪さをするような奴には見えないと和明は思った。マッチョなパンツはルナとミルクィに目をとめると両手をもっこりしたビキニパンツの中に突っ込んだ。

{つづく}

35話

変人パンツーは「うっう！ うっう！」と言い胸の筋肉を動かしながらビキニパンツ内からパンニを取り出した。そのパンニをルナとミルキーの前に行き渡そうとしながら言った。

「お嬢さん方パンニをどうぞ。僕のパンツの中で温めておきました」
ルナとミルキーは気持ち悪いものを見るような視線をパンツーにおくりながら

「……気持ち悪い」

「そんなの食えるか！」

和明はパンニの出所をしり土の地面に膝をつき「ゲーゲー」と吐き出そうとしていた。和明は気分が悪そうな青い顔をしている。パンツーは自慢の筋肉を強調するポーズをとりながらルナとミルキーに中傷され傷ついた顔で

「天よ、なぜ僕の慈善の奉仕は大概の人々に拒まれるのか……訳が分からない」

和明は涙目（パンニを吐き出したため）でパンツーに怒鳴った。

「パンニをパンツから取り出しゃ、誰でも嫌がるわ！」

パンツーは雷が直撃したかのようなショックを受けた顔で喋った。

「パンツの中で皆の為にパンニを温めてるんだ」

和明はこいつには何を言っても駄目だとわりきった顔で魔魂を取り出し最後の忠告をした。

「大人しく捕まる気はあるか？」

パンツーは憤慨し

「悪さもしてないのになぜ僕が逮捕されなきゃならないんだ。世の中は理不尽だ」

パンツーは胸元から金属製のデイルドーを引き抜いた。和明がこちらから見て左から右に切り付けた。一メートルはあるデイルドーで受け止めるパンツー。鏢ぜり合いは筋骨隆々のパンツーにぶがかった。和明がじわじわ圧されだす。和明は解魂するとパンツーの背後に瞬間移動して縦切りを放つ。パンツーはそれにも反応して体を回転させデイルドーで防御した。パンツーは勝機とみて「解魂！」と言った。パンツーの周囲十メートルの地面から土を掻き分けデイルドーが凄い早さで生え出した。ルナとミルキーは観戦していた。和明はワープして距離をとった。すると悲痛な声がこだました。

「お尻最高ー！ グワー！ これ以上は入らないー！ NOーー！」

パンツーはお尻に伸びてきたデイルドーが刺さり敗北した。パンツーを縄で縛りラバタ国の兵士に引き渡し無事一件落着した。

{}つづく{}

36話

今回の依頼はループ国の南方にあるタイザ国、その国の絶世の美女である姫君がパレード中にモンスターにコーラ砂漠の古い城に掠われ、その救出に行くのだ。和明達はサンサンと照り付ける日和の下タイザ国の南にあるコーラ砂漠を歩いていった。あたり一面砂、砂、砂である。木々、草の一本も見つからない。焼けるような暑さが和明達を襲う。和明は茶色のTシャツを背負った鞆に入れショーツを履いて半裸の姿だ。ルナとミルキーは上着が汗ばんでブラジャーが透けている。和明は嘆いた。

「この砂漠熱すぎるぞ」

ルナは肩にかけたタオルで顔の汗を拭いながら地図を持ち

「……あと少し南に進むと古城がある」

その時、声を弾ませたミルキーが

「オアシスよ！ それに後方に古ぼけた城があるわ」

和明はハイテンションな声音で

「ルナ、ミルキー。美人な姫様を助けに行くぜい！ 救い出したら惚れられるかも！」

「なんかテンション高いわね」

「……なんかうざい」

低い木々が新鮮そうな湖を囲みその向こう側に外観がレンガ作りの城がある。城の壁は色あせ所々レンガが欠けていて入口も薄汚れた橋が降りその下を水が流れている。ミルキーとルナは湖を近くに見ると服を脱ぎ捨て下着姿になり水の中にダイブした。ルナの体は華奢で凹凸がないがウエストがキュッとひきしまり白色の下着が魅力的だ。ミルキーは成長段階なのか胸とお尻が発達していてピンク色のフリルがついた下着がセクシーだ。ミルキーはクロールのような泳ぎ方をしながら

「気持ちいい。和明も泳いだら」

和明はルナとミルキーの姿に目のやり場にこまりながらも

「泳いでる場合かよ。姫様の命がかかってるんだぞ」

{つづく}

37話

和明達は数十分湖で泳いだ（結局和明も泳いだ）後代えの下着に着替え古びた城に侵入した。中は荒れ果てていて扉は朽ちて壁は崩れ地面には亀裂が走っていた。和明達は薄暗い城内を用心しながら歩いていく。もちろん魔魂を手握っている。すると前から顔や体から骨がむき出しになったゾンビ犬が三匹現れた。和明達はゾンビ犬達を一人一匹ずつ切り（ミルキーはハンマーでしばき）倒した。何個目かのボロボロで苔が生えた扉を押し開くと青い肌をした俊敏で空を飛べる羽を背中に生やしたモンスターブルクが太っちょで少し埃を被ったドレスを着た器量の悪い女に鞭打たれていた。ブルクは手足を縄で縛られ火傷の痕や擦り切れた傷が散見された。ブルグは和明達を見ると

「助けてくれ！ 毎日拷問を受けてたんだ！」

そう言ったルブルクを整っていない顔立ちの女が鞭でしばいた。

「グワツ、痛い！ 王女様、もう許してください……」

醜い容姿の女は顔に残虐な笑いを浮かべながら

「駄目よ。世界で一番美しいのは誰？」

また鞭で顔を打たれたルブルクは涙を流しながら言った。

「イタッ。……それはタイザ国の姫君ミファー様です」

和明はア然とした顔で

「あれが絶世の美女？」

ガツクリと肩を落とす和明にルナは言った。

「……噂なんてあてにならない」

それからルブルクを解放すると喜んで飛んで逃亡した。ミファアは残念そうな顔をした。その後ミファアを説き伏せタイザ国に和明の魔魂の力で瞬間移動した。なんでもこの城に連れ去られた後にミファアは魔魂（鞭）を使ってルブルクに勝ったらしい。

〜つづく〜

38話

ここは心地よい風が吹くソンプ村。ループ国の西にある。白髪が目立つ村長は和明達に説明していた。

「この村の人を襲っているのは吸血人というモンスターですじゃ。身なりは頭がバーコード禿げ頭なおっさん顔で鉄の巨大なストローを持って赤いフンドシを履き鳥のような羽が背中にありますじゃ。奴らを倒すには青いフンドシを巻いたマザーを倒すことです。さすれば残された吸血人も絶命しますじゃ」

和明は気合いを入れて

「よし、青いフンドシのモンスターを倒せばいいんだな」

すると村の西方から若い女性の声で「嫌ー！」と悲鳴が聞こえてきた。和明達は魔魂を握り西へ向かった。

十

吸血人が若い女性を押し倒し鉄のストローを胸部に突き刺そうとしていた。

「吸血人が血をすってあげるぞー」

赤いフンドシがはためき硬そうなストローが女性の胸に刺さる：：と思ったが投げられた黒い剣が吸血人のバーコード禿げ頭に突き刺さり吸血人は絶命し俯せに倒れた。赤い血だまりができる。和明達は息を弾ませながら倒れていた女性の側に駆け寄った。

「大丈夫ですか？」

「ええ、なんとか」

和明の質問にそう答えるとそばかす顔の女性は立ち上がった。しかし女性は先程の恐怖からか足が震え転びそうになる。ミルキーが両手で女性の肩を支えた。

「ご迷惑をおかけしました。危ないところを助けてくださりありがとうございます」

村長が杖をつきながら早足でやってきた。和明は黒い剣を吸血人の頭から引き抜いた。

「わしの孫よ。怪我はないかい？」

「助けて頂いたから大丈夫よ。おじいちゃん」

村長の疑問にそばかす顔の女は言った。村長は和明の方を見ると「孫を助けてくれてありがとう。吸血人はこの村の西の森を巣穴にしておる」

和明は剣を振り血を飛ばすと

「わかった。行ってくるぜ」

{つづく}

39話

和明達は森に入った。木々が乱立しているが草は少なく歩きやすい。しかし木の根が地面から顔を出しているので注意しないと転倒しそうだ。すると早速バツバツサと低空を吸血人が飛んで来た。バークード禿げが風で揺れている。

「セクシーなお嬢さん血を吸わせておくれ」

吸血人はそう言うともルキーに鉄のストローを突き刺そうとした。ミルキーは

「あんたなんかに吸わせる血は無いわ」

ミルキーのハンマーが吸血人の側頭部に直撃した。吸血人は血を吐いたかと思うと昏倒した。すると騒ぎを聞き付けたのか三匹の吸血人が飛来した。皆同じ姿だ。バークード禿げ頭に赤いフンドシ、おじさん顔。和明は駆け一番身近にいた吸血人の首を撥ねた。血が噴き出す。和明は返す剣で残りの二匹の胸を切り裂いた。

「グエエー！」

「グギャー！」

吸血人の死体を踏み越えしばらく進むと開けた場所に出た。その中心に吸血人の三倍の大きさがあるのかと言う吸血人がいた（吸血人の身長は百六十センチメートルぐらい）。見た目は吸血人と同じだが青いフンドシを巻いている。和明は意識を集中し瞬間移動し、親玉吸血人別名マザーの顔の前に姿を現しマザーの目を切った。

「グゲー！　よくも、許せん！」

マザーは鉄のストローで和明を叩こうとして剣で受け止められる。その隙に接近していたミルキーは「解魂」と言うとジャンプしマザーの腹をハンマーでぶっ叩いた。マザーは悲鳴を上げ体に流れた電流により動きが鈍くなった。そこでマザーの正面に立っていたルナが解魂し幅一メートル長さ十メートルの剣で切りつけた。マザーは避けようとするも体が痺れて動けず真っ二つに切り下ろされた。マザーは

「グガアー！」

マザーの体が地面に「ドシン」と重力により落ちた。マザーを倒した証拠に青いフンドシを奪い持ち帰る和明達なのでした。

{つづく}

40話

和明達はベリンまでは和明の能力で瞬間移動（瞬間移動は行ったことのある場所と見える場所にしか行けない）し聖地と呼ばれるベリン国の西にある場所の山の獣道を進んでいた。辺りは樹齢数百年はくだらない大木が犇めきあっていた。また、茨や丈の長い植物が邪魔で進みにくい。歩いていると鳥の糞が和明の頭に落ちて来た。

「汚い！」

と和明は嘆いた。しばらく進むと直径数百メートルの開けた円形な場所にでた。和明達の目的は聖地にあるサーカス火山に呪いの腕輪を投げ入れるためだ。なぜわざわざ腕輪を廃棄しに行くかというところの腕輪はあしき者の手に落ちれば甚大な災厄をもたらすとされているからだ。邪な生物以外の者が所有すると持ち主が不運な目に逢わされる。またこの腕輪はドワーフによってサーカス火山で造られたためその火山でしか破壊できないのだ。

「二人共武器を出せ！」

和明の呼びかけとほぼ同時に和明達は魔魂を出した。和明はルーブリングを持っていているせいか、吐き気と目眩がした。和明達の周りを黒い上下のスーツを着てサン格拉斯をかけた男達が囲んだ。サン格拉斯の男達は三十人ばかりいて各々武器を握っている。一人の黒スーツが革靴の音を響かせ進み出て言った。

「死にたくなければ呪いの腕輪……ルーブリングを渡せ」

和明達はルーブリングをギルドの受付で預かった後にも黒いスーツ姿の男達に襲撃されていた。闇の組織だろうか。その時は相手が

三人だったので楽勝だったが今回は失敗を教訓にしたのか数が多い。

「この腕輪はやれないな」

「……勝負」

「欲しかったら力づくで奪うのね」

和明、ルナ、ミルキーが挑発的な言葉を発する。二つの勢力は戦い始めた。

}}
つつく
}}

41話

和明は駆け片手斧を持った男の胸に剣の柄の先で強打する。打たれた男は悲痛な声を上げると倒れた。ルナは解魂し巨大な剣の腹でサングラスの男達をのしていく。ミルキーはハンマーを振り回し次々に黒いスーツの男達を気絶させていく。

「ウオー！」

怒声をあげながら両刃の大きな剣を振りかざしたサングラスの男が和明の背後に迫る。和明は切られたかと思ったが瞬間移動しかわした。そして大きな剣の男の頭を剣の腹で殴った。殴られた男は赤いたんこぶができ気を失い倒れ伏した。三十分もすると勝敗は決した。黒いスーツの男達は一人を残して意識を失っていた。最後の一人は「ヒー」と叫ぶと足早に逃走した。和明は魔魂をしまい

「なんとかなったな」

「……油断大敵」

ルナはそういうと空を指差した。羽の端から端まで三メートルはあろうかという黒い怪鳥が空から羽ばたきながら降りて来た。怪鳥は「クエー」と声を上げると和明達に向かって羽ばたいた。すると小さな竜巻が起こり和明達を襲った。余りの早業に間一髪の所で和明が剣の柄を口にくわえルナとミルキーを掴み瞬間移動した。怪鳥は和明達の姿を探して顔を左右に振る。しかし姿は無い。

「こっちだよ」

和明の声はなんと怪鳥の背中からした。怪鳥は振り返り和明達を視界に入れた。しかしそこまでしか怪鳥は行動出来なかった。なぜなら和明が怪鳥の首を撥ねたからだ。和明達は落下する怪鳥の背中から三メートル程の距離を飛び降りた。

つつく

42話

和明達は傾斜のきつい昇り坂を歩いていた。サーカス火山は活火山だけあって山の中腹なのに熱気を感じる。三人は汗を流した。また溶岩が流れている場所もある。和明達はずいに山頂付近の洞窟を見つけた。その中からは焼けるような暑さが伝わって来て入るのを躊躇してしまう和明。その背中をルナとミルキーが押す。

「和明、壁になってちょうだい」

「……和明ファイト」

ミルキーとルナの発言に渋々進む和明。中は広いホールのようになっていた。真ん中には穴が大きな空いていて中には溶岩が煮たつて泡を噴いている。和明達が穴に近づこうとすると地面を破り石の巨人が姿を現した身長は四メートルはある。ごつごつとした姿の巨人は和明達にパンチを繰り出して来た。和明が剣で受け止める。ミルキーがその隙に巨人の横腹をハンマーで叩いた。巨人に雷が流れ動きが鈍くなる。和和明は巨人の肩に瞬間移動すると巨人の赤く光る目を剣で貫いた。

「ギエー！」

巨人の悲痛な声が洞窟内にこだました。和明が剣を引き抜きジャンプして着地するとルナが解魂しどでかい剣で切りかけた。三度目のルナの攻撃で巨人は命を落とし仰向けに倒れた。和明は

「よし、後は腕輪を捨てるだけだな」

ドロドロの溶岩内に腕輪を落とそうとして和明の手にきつい静電

気が発生し痛がる。ルナが和明の手から腕輪をとり溶岩内に投げこんだ。徐々に溶け沈んでいく腕輪。こうして依頼は完了した。

{つづく}

43話

「ソルド村についたぞー」

和明はそう言うなり愚図ついた天候の空を見上げた。黒雲が太陽の光りを遮り天空の覇者のように陣取っている。ルナはパンニ（見た目は苺で味はチョコレート）を左手に持った袋から取り出し口にほうり込みその美味しさから微笑を讃える。ミルキーはそんな幸せそうなルナに抱き着き頬を擦り付け

「ルナちゃん、やっぱり可愛いわー。ハアハア」

ルナはミルキーの抱き着きアタックに慣れ平然とした顔で村の中へ入っていく。村の入口には立て札があり村の外周には木のバリケードが張られている。これならある程度の防御策になるだろう。今回の依頼は生きる魔剣の討伐でルーブ国の西にあるラバタ国の北東に位置するソルド村に足を運んだのだ。なんでもその魔剣は突如村に姿を現し通行人達をひとりで切り付けてくるらしい。和明は

「上手そう！ おっちゃん、一箱ちょうだい」

露店のタオルを頭に巻いたおじさんからパックに入った焼きそばに似た食べ物と箸を貰い代金を払った。

「ありがとうよ、兄ちゃん」

屋台のおっちゃんは輝く笑顔でそう言った。和明はパックを開け箸を持ち焼きそば風味のフードを食べようとした途端に「グワー！ ひい、助けてくれー」と悲痛な声が聞こえて来た。和明は

「おっちゃん、これ持つて。後で取りにくるから」

和明は渋々食物を預け魔魂を取り出し、けたたましい音の発信源に向かって駆けた。ルナとミルキーも後に続く。

和明は少々食べ物を預け魔魂を取り出し、けたたましい音の発信源に向かって駆けた。ルナとミルキーも後に続く。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{う} \\ \text{づ} \\ \text{く} \end{array} \right\}$$

44話

「グワ！」

武器屋の店主が店から逃げ出した。だが腕に飛んできた商売物のナイフが掠り悲鳴を上げた。血がほとばしる。和明達は武器屋の前に駆け付けた。和明は「大丈夫か？」と尋ね尻餅をついている店長を立てせた。

「ありがとう。魔剣が出たんだ」

店主が店の方を震える手で指差す。すると武器屋の入口の扉を切り倒しその下を潜って空をひとりでに飛ぶ魔剣が姿を見せた。魔剣は柄の部分が赤や青の宝石がびっしりちりばめられた美しい姿をしていた。魔剣は武器屋の中から魔法でナイフや剣を赤く光らせると和明達に飛ばして来た。瞬間移動でかわしことなきを得た和明達と武器屋のおじさん。和明達がいた地面には深々と刃物が突き刺さっていた。武器屋の店主は「ひー」と声をあげるとすたこらと逃げ出した。魔剣は次は自分自身で攻撃を仕掛けて来た。横切りが和明の首を狙うが黒一色の剣で防ぐ和明。魔剣は十回突いて来た。和明は高速で見切り全てをかわす。次は和明が反撃に出た。魔剣の背後に瞬間移動すると強化魔法で剣を赤く光らせ魔剣の柄に切りかけた。次にルナも横切りを魔剣にお見舞いし、締めにもルキーがハンマーでしばいた。魔剣は至る所にひびや亀裂が出来た。和明が息の根を止めようと両手で切り付けようとした時異変が起きた。魔剣から煙が出たかと思うともう一人のミルキーが姿を現したのだ。しかも恰好はヒモビキニを着た殆ど全裸の姿だった。しかもやたらと胸と尻が大きいグラマーな姿だ。偽ミルキーは乳首がヒモビキニを凹凸を作っている。

$\{\sim, \cup, \cap\}$

45話

和明は右鼻からダクダクと鼻血を流しながらグラマーなミルクィを見つめ

「ヒモビキニ最高！」

和明が戦意を喪失したのをいいことに偽ミルクィは色々な悩殺ポーズを決めていく。油断した和明を偽ミルクィが魔剣で切り付けた。ルナがそれを阻止し

「……和明しっかりして」

ミルクィが赤い顔で偽ミルクィにハンマーの一撃をお見舞いし

「人の外見で変なことするな！」

と叫んだ。偽ミルクィは「イヤー！」と言うと姿が消失した。そしてひびだらけの魔剣が湯気を上げ泡立つようにぶくぶくと膨れ上がり外見は熊の姿で全身から刀身が何百本も生えた姿に変わった。その熊型のモンスターは低音で言った。

「我は魔剣の真の姿ウィザードなり。我が真の姿を見た限りお前達には死しかないぞ」

ミルクィは先手必勝と考えハンマーで打ち付けた。しかし伸縮するウィザードに生えた刀身がミルクィの頬を切った。ミルクィは血を流しながら後退し

「接近戦は不利よ。遠距離から攻撃して」

それを聞いたルナが解魂し巨剣で切り付ける。ウィザードから伸びる剣とぶつかり金属音が響く。すると茶色い地肌のウィザードは右肩を突き出しルナに体当たりをかました。ウィザードの肩の剣が怪しく光る。ルナは回避しようとしたが相手の俊敏な動きについていけず当たると思いきや和明が瞬間移動で救出する。和明はルナの右手を離すと言った。

「必殺！ 無敵遠距離攻撃！」

和明は幾度も剣を振るった。しかし剣の刃が無い。ウィザードに目をやると空中に浮かんだ剣の先で切り刻まれている。和明は刀身だけ瞬間移動させて攻撃していたのだ。遠距離対決では不利と見たウィザードは和明に走って近づこうとするが和明は瞬間移動で遠退いた。

「ハアー！」

和明は強化魔法で剣を赤く光らせ遠距離攻撃で数十回ウィザードを切った。ウィザードは「ウガグー！」と沈痛な悲鳴を上げると後ろ向きに倒れ動かなくなり剣の姿に戻った。そして「ペキ」と音をたて二つに折れると砂に変わった。和明達は魔魂を胸にしまうと村の露店へと歩いて行った。しかし預けていた焼きそばもどきは冷えて切っていた。しかし屋台のおじさんの好意で和明達は焼きたてをご馳走になった。三人はとても美味しそうに召し上がった。

{つづく}

46話

ギルドのランクをAに上げた和明達は余暇を利用してアルド大陸のルーブ国から数十キロ離れた場所にあるムーラ島に旅客船で向かっていた。目的は勿論観光と遊びである。ミルキーは上はボーダーカットソー下はクロップトパンツの軽装で先首に設けられた柵から身を乗り出しどこまでも青い海を眺めていた。ルナは白いタンクトップの上に灰色のTシャツを着て薄茶色のパンツを履いていた。ルナは地面に右手をつき青い顔をしていた。どうやら船酔いしたらしい。和明は白いTシャツの上に薄黄緑のシャツを羽織り膝までのショーツを着ている。和明はルナに話しかける。

「気分はどうだ？ 吐きそうか？」

「……まだ大丈夫……」

ルナは涙声で答えた。とそこで船員の一人が大声を張り上げた。

「海賊が現れたぞー！」

その声を聞き船内から武装した男達が十数人姿を見せた。警備員だろう。船員は船の内部に避難していく。海賊船は旅客船の右舷に船を近づけ乗り込んで来た。和明達も参戦した（ルナは真っ青な顔だったが）。

{}つづく{}

47話

ナイフを片手に揺れ動く旅客船上を坊主の男が駆けて来た。和明は剣の腹で坊主の頭をしばき気絶させた。ルナとミルキーも海賊達をのしている。和明目掛けてタンクトップを盛り上げる筋肉質な男がラリアットをかまそうと走って来た。和明はその攻撃を避け背後に回るとマツチヨの首筋にチョップをくらわした。その男は白目を向き倒れた。警備員達も応戦していてこっちが遥かに優勢だ。海賊船に逃げ出す奴まで現れた。

「お前達情けないぞ！ それでも男か！」と声がした。

その声の主は美しい顔立ちの妙齡の女だった。Tシャツを胸が膨らませミニスカートからはなめかしい足が伸びている。しかも赤い肌をしている。魔族のようだ。彼女は胸元から片手剣を取り出すと和明に切りかかった。バックステップでかわす和明。女魔族はさらに剣を一閃させた。和明は黒い細身の剣で受け止める。和明は踏み込み突きを放った。しかし女魔族には当たらなかった。和明は女魔族の背後に瞬間移動すると剣を女魔族の首に当て言った。

「抵抗しないなら怪我はさせない。武器を捨てるんだ」

「ああ、もう。分かったよ私の負けよ」

女魔族は片手剣を船の地べたに落とし両手を上げた。「カランガラ」と音がした。

{つづく}

48話

和明達や警備員が海賊達を捕らえ縄で縛った。その時船体はボロボロで穴が開いたりしていて塗装も剥げた不気味な船が近寄って来た。ロープで縛られた一人の海賊が怪しい船を見て叫んだ。

「伝説の幽霊船、ストレッチャー号だ！ 早く逃げろ！」

しかし幽霊船は旅客船の左舷に軽くぶつかった。ストレッチャー号から破れた衣服に腐食した体のゾンビ達がわらわらと乗り移って来た。和明達と警備員達は攻勢に打って出た。和明は身近にいた両手を上げ「アー、ウー」と声に出すゾンビの首を切り落とした。しかしゾンビの体は首無しで和明に迫って来た。和明はジャンプし縦切りでゾンビを両断した。警備員達もゾンビ達の生命力に苦戦を強いられていた。そんな中、幽霊船からキャプテンハットを被り昔は豪華であったろう服を着た目が落ち窪んだゾンビが出現した。右手は金属製のフックになっていたが所々錆びている。左手には両刃の剣を握っている。キャプテンハットのゾンビは言った。

「我ナルハと一騎打ちをする者は居ないか？ もし勝ったなら手を退いてやろう」

「その勝負買った！」

そう和明は言う和海がしけていて船同士がぶつかり揺れる中、猛スピード駆けてナルハの足を狙い斬撃する。旅客船の上でナルハと和明は剣舞を舞うように戦闘した。二人の力は拮抗していた。ほんの少しの油断が命取りになる。和明は賭にでた。

「あ、あそこで美人の女性が全裸で踊ってる！」

「え、どこどこ!？」

ナルハは興味深々で和明が右手で指差した方を見た。そこには股間部分の服が破れたゾンビが「てへ」と照れながら立っていた。ナルハは激怒し和明の方に視線をやった。

「う!」

呻くナルハ。それもそのはずナルハの首筋に黒い剣が突き付けられていたからだ。和明は笑みをこぼしながら

「俺が勝ったならどうするんだったかな？」

「く、くそ! 全員撤退だ!」

ナルハと生き残っていたゾンビ達是不承不承にストレッチャー号に帰って行った。そして姿を消した。

~つづく~

49話

ここは常夏の島ムーラ島。その美しく透き通った海岸に和明達の姿があった。ミルキーは赤の上下のビキニ姿でルナは青いスクール水着に近い服装だ。

「……和明、私可愛い？」

「おお、健康的で可愛いぞ」

ルナの質問に和明が答える。二人は海に入っていた。和明は潜って蟹のような姿の生物を捕まえた。それをルナに見せ

「これ何？」と和明。

「……初めて見た」とルナ。

「和明ー！ ちょっと来てー！」

ミルキーが叫んだので何事かと思い海から上がりミルキーの側に駆け寄った。ミルキーは俯せになり上の水着の紐を除け、和明にオイルを差し出した。

「これ背中に塗って」

「ええ！ 俺が塗って良いの？」

「いいから、早く」

「分かった」

和明は右手の平にオイルを乗せミルクィの肌に塗っていく。ミルクィの肌はきめ細やかでスベスベしていた。

「あ！」

和明はオイルで手が滑り豊満なミルクィのお尻を触ってしまった。柔らかくプルンとしていた。ミルクィは怒り

「ちよつとどこ触ってんのよ！」と言いながら体を起こした。そのためミルクィの胸を隠す物はなにも無かった。標準サイズながらピンク色の乳首だった。和明はジーツとミルクィの乳房を見つめる。脳裏に焼き付けようとしているようだ。

「キャー、変態！　がん見するなー！」

それに気付いたミルクィは左手で両胸を隠し右手で和明にビンタを食らわした。頬を赤く腫らした和明は何度も謝り許してもらいミルクィの背中にオイルを塗る。全体に塗り終わった和明は

「終了！　俺暑いからまた泳いでくるよ」

「ええ、いいわよ」

和明は海にダイブした。そしてひとしきり泳いだ。その後ムーラ島の宿屋に泊まって次の日にルーフ国に帰還した。

{つづく}

50話

ヤルド国の西に位置する朽ち果てた廃城コンポート城に和明達は来ていた。城の外観は風雨に曝され白く美しかった頃の名残を残しながらも城壁の壁は所々崩れている。また、壁は色あせ入口の大きな扉は倒れ腐っている。和明達は堀に架けられた穴が一ヶ所開いた橋を渡り城壁内に突入した。中庭には十数匹の身の丈二メートルはある熊に似た外見の角を一本持ち全身に生えた体毛が銀色のモンスターが居た。名前はシルバークリズリーだ。和明達を餌と認識したシルバークリズリー達は和明達に襲い掛かってきた。今回の目的は不死と噂される頭に三本の角を持ち口から鋭い牙が剥き出しで全身金色のラーズクリズリーの退治だ。

「たあ！ よっと」

和明はか細い剣を一閃させ一匹のシルバークリズリーの胸を深くと切り裂いた。そのシルバークリズリーは悲鳴を上げ倒れた。そして和明は別のシルバークリズリーの攻撃を前転でかわした。

「……敵多い！」

と言いながらルナが解魂し幅一メートル長さ十メートルの剣で横切りを放った。三匹のシルバークリズリーを上半身と下半身に切り分けた。

「えい！ やあ！」

ミルキーはハンマーでシルバークリズリーの頭を殴っていく。二匹のシルバークリズリーを瞬殺した。残ったシルバークリズリー達

を和明が瞬間移動しながら首を撥ねていく。

つづく

51話

ついに雑草が膝まで生え放題の中庭で最後のシルバードリズリーを和明が切り伏せた。

「よし、城に入ってラースグリズリーを探すぞ」

「……うん」

「いくわよ」

和明の息こんだ声にルナとミルキーが返す。和明は錆びて色が変色した金属製の両開きの大きな扉を開いた。中は通路になっていて床に敷かれた赤い絨毯は破れたり虫に食われて穴だらけだ。扉を一つ一つ開けラーズグリズリーを探し求める和明達。三つ目と七つ目の部屋にはシルバーグリズリーが潜んで居た。両方ともルナが退治した。そして通路の突き当たりにある部屋の前に全身金色で頭に三本の角を持ち鋭い牙が剥き出しのラーズグリズリーが佇んでいた。和明は全長三メートルはあるラーズグリズリーにジャンプして首を切り撥ねた。

「よっしや！ 圧勝！」

勝利を掴んだと確信した和明はガッツポーズした。しかしラーズ・グリズリーの首からニョキニョキと頭が生えてきた。

「ゲ！」

$\left. \begin{array}{c} \text{う} \\ \text{づ} \\ \text{く} \end{array} \right\}$

52話

和明の腹をラーズグリズリーの鋭い三本の爪が襲う。ルナが剣でそれを遮った。

「……大丈夫？」

「ありがとう、助かった」

その隙にミルキーがハンマーでラーズグリズリーの頭部を強打した。ルナは解魂していたらしくバチバチとラーズグリズリーを雷が帯びた。ラーズグリズリーの動きが鈍くなる。

「和明、ルナちゃん好機よ」

和明はラーズグリズリーの胸に剣を深く突き刺しルナはラーズグリズリーを十文字に切った。しかしラーズグリズリーの負傷した部分はみるみるうちに回復していく。並大抵の相手ではなかった。さすがにAランクの依頼だけはあった。そんな時ラーズグリズリーの背後の部屋から声がした。「モストロ……もういいわ。その人間達を通しなさい……」

モストロと呼ばれたモンスターは体を隅に寄せ道を開けた。和明達はモストロが守備していた扉を潜った。そこには大きなてんがい付きのベットに仰向けに寝ているラーズグリズリーがいた。

「私を討伐に来たのね。モストロは私の分身なの……だから不死なの……でもわ、私は死ぬ寸前なの……うぐっ」とラーズグリズリー。

「病気なのか？」

と和明はベットに近づきながら尋ねた。窓は砕け地面や壁は崩れたり亀裂が入っている。広い部屋だ。辺りからは獣の臭いがする。ラーズグリズリーは苦しみながら

「不治の病よ……。うぐぐ。ぐわああ！ うぐ」

とそこでラーズグリズリーは目をカッと見開き痙攣すると動かなくなった。享年三十歳だった。帰り道にモストロの姿は無かった。本体が死んだ為消えたのだろう。

{つづく}

53話

大分強くなった和明達はループ国の遠方にある大国ヤルド国に来ていた。巨大な城門を潜ると数メートル先から商店が軒を連ねていた。野菜や魚やアクセサリーから武器、防具とありとあらゆる物が売られている。流石魔族に対抗する強国だけのことはある。行きかう人々も大勢いる。主婦と思しき女性達や鎧を着込んだ屈強な男達に杖をつく老人。衛兵も見回っていて治安も良さそうだ。ミルキーがアクセサリー売り場に足を止めて商品を見始めた。

「これルナちゃんに似合いそう。ハアハア」

怪しい声を出しながらルナの首元にハート型の装飾が施された銀色のネックレスを宛がうミルキー。ルナは怯えたような顔で

「……や！」

ミルキーは悲しそうな顔をして商品を元あった棚に返した。ルナは生鮮食品屋でパンニを大人買いした。軽く三十個は買っただろう。和明達は商店街を出て真っすぐ歩き赤い建物の前から右に曲がった。そこからしばらく行くと豪奢な家屋の真ん前に来た。ここが今回の目的地賢者ムーフラの自宅だ。立派な鉄柵の門のノッカーを鳴らす。すると本館の扉を開け黒と白を基調とした服を着たメイドさんが出て来た。十五、六歳だろうが胸の成長度合いが半端ない。まるでメロンを服の中に入れていようだ。走るメイドさんは胸が弾んで服を上下にさせている。そして鉄柵の前に来るとメイドさんは聞いた。

「ご用件はなんでしょうか？」

和明はメイドさんの胸を凝視しながら

「そのメロンの味をみたいんだけど……」

「は？」

メロンという言葉に馴染みがないようで反応はいまいちだったが、ルナとミルキーは察したようで一人片方の頬を抓った。

「痛たた！　嘘です。ムーフラさんにお話があって来ました」

メイドさんは「分かりました少々お待ちください」と言うと館内に戻って行った。

〜つづく〜

54話

和明達は埃一つ無い瀟洒な客間に案内された。横長なソファとテーブルが中心を陣取り河原の風景画が額縁に入れられ壁に飾られている。部屋の角には花瓶に注された赤い花が置かれ部屋の雰囲気をも明るくしている。和明達はソファに腰を落ち着けた。高級なソファなようでとても柔らかく座り心地が良い。「コンコン」とノックする音が聞こえた。

「はい」

と和明。すると扉は開け老人が杖をつきながら入って来た。長い銀髪と腹まで伸びた銀色の髭を生やした人物だった。

「はじめまして、お待たせしてすみませんね」

「いえいえ。こちらこそいきなり押しかけてすみませんでした」

賢者と呼ばれる老人ムーフラの謝辞にミルキーが言葉を返す。ムーフラは和明達の向かいのソファにゆっくり着席した。今回は古今東西の広い見識を持つと噂されるムーフラにあることを尋ねに来たのだ。和明は早速本題をきりだした。

「異世界について伺いたいんですが」

ムーフラは「ふむ」と言いながら顎髭をさすり

「私に答えられる知識があるかどうか……」

「そうおっしゃらずに教えてください。異世界へ行く方法を知りた

いんです」

和明の真剣な口調にムーフラはうなづき話し始めた。

「ああ、それなら聞いた事がある。魔族が住む地、魔境にあるルーノの森の秘境に不思議な扉があるという……その扉はなんでも異世界に通じているとか」

和明は喜び「やった!」と言ったがルナとミルキーは複雑な顔をしていた。

{つづく}

55話

和明達は丁寧にもーフラにお礼を言うと早速ヤルド国の北に位置する魔境へと足を向けた。和明達は鬱蒼と繁った森を抜けるともーフラに詳しく教えてもらった魔境の西にあるルーノの森を目指した。だが少し進んだ所で魔族の巡回兵に見つかった。

「侵入者か！」

相手は四人もいる。その内の一人は走り去った。応援を呼びに行ったのだろう。魔族達は鎧兜を身につけている一人の魔族は魔魂を取り出した銃だった和明は駆け銃を一刀両断した。その魔族は気を失い倒れた。後の二人も魔魂を出現させた。斧と剣だった。ルナは斧を使う魔族と鏢ぜり合いを演じた。ルナは魔力で剣を強化し防ごうとした斧事魔族を切り裂いた。「グワー」と言いながら倒れ呻く魔族。最後の一人はミルキーが相手の横切りをしゃがんでかわし頭にハンマーの強烈な一撃をおみまいした。その魔族はあっさり気を失った。今回戦った魔族は弱かった所で下級魔族だったのだろう。圧勝した和明達だったが平原の向こうから数十人の魔族が現れ走って来たので撤退を余儀なくされた。森を抜けヤルドの城門を潜った和明達は妙案がないか再び賢者もーフラを尋ねることにした。

{つづく}

56話

和明達は前回の同じ客室でもてなされた。紅茶のような飲料を飲みながら和明はムーフラに聞いた。

「魔族が多くて魔境に潜入出来ないのですが何か策はないですか？」

ムーフラは顔をしかめた後

「方法が一つある。とても危険を伴うかもしれんが……」

和明はソファーから身を乗り出し尋ねた。

「どんな方法ですか？」

「聖地の中心部にムルーの泉がある。その泉には魔源の石と呼ばれるクリスタルがあるのじゃ。その石を破壊したなら魔族の大半は消え去り魔界に戻ろう。魔族の殆どはあのクリスタルのお陰でこの世界に存在しておるのじゃ」

和明は首を傾げながら

「魔族の大半？」

「そうじゃ魔族の王ルミエラ以外はじゃ」

和明はさらに質問する。

「なぜ？」

「ルミエラは強大過ぎる自身の魔力を持って最初にこの世界に現れた魔族なのじゃ。そののちクリスタルを作り同胞を呼び寄せたのじゃ」

和明は立ち上がり

「ありがたいな、ムーフラ。聖地のムルーの泉に行ってみるよ」

「しかし、用心することじゃ。大切な物を隠しているぐらいじゃから何者かが守っておるじやろう」

ムーフラは警戒するよう訴えた。和明達はムーフラの豪奢な館を出て聖地へ向かった。

〜つづく〜

57話

聖地に瞬間移動して来た和明達は聖地の中心部にあるムルーの泉へ向かった。木々が乱立し下草が膝元まで伸びていて歩きづらい。

「待ってろよ！ 魔源の石」

意気揚々と言う和明の背後をルナとミルキーが付き従う。ルナが

「……和明は異世界に行ける扉を見つけると行っちゃうの？」

「え、そうだな両親も心配してるだろうしな……」

と和明。ルナは目尻に涙をためながら

「……和明がいなくなったら居場所が無くなっちゃう」

ミルキーが宥めるように

「ルナちゃん。私が居るわよ」

「……和明の側がいい」

ルナがそう言っていると開けた場所に出た中心には小さな泉がありとても浅い。水の中に赤いクリスタルが光りを反射している。泉に近づこうとする和明達の視界の上から赤い龍が下りてきた。翼の端から端まで三メートルはある。とても大きい。赤い龍が頬をぷくぷくと膨らませると次ぎの瞬間火炎放射機のように火を噴いた。和明は魔魂を取り出すと左手でルナの肩を触り右足でミルキーの膝を触り瞬間移動した。和明達が元居た場所は地面が焼け焦げていた。ミルキーは

「近づくのは勇気がいるわね。遠距離で倒しましょう」

和明は剣の刃先だけ瞬間移動させて火龍を切り刻んでいく。赤い血を流す火龍はみるみる傷だらけになっていく。極め尽けはルナが解魂して幅一メートル流さ十メートルの剣で輪切りにした。命を落とした火龍はドスンと倒れ込んだ。

{つづく}

58話

火龍を倒し気分が高揚していた和明は泉に近づき足を踏み入れようとした時、耳元で囁かれた。

「動くと殺すぞ」

和明は瞬間移動で距離をとった。泉の前には赤い肌をしていて白い角の生えた魔族が立っていた。手には突剣が握られている。

「誰だ？」

和明は尋ねた。魔族は「ククク」と笑うと

「我はクリスタルの番人、上級魔族ノーマス。お前は知っているぞブードゥーを倒した男だな。ブードゥーは旧知の仲だった。今日はそのともらいをしよう」

ノーマスは駆け和明に五度突きを放った。全てかわした和明は最後の突きをバックステップで避けた。それを見たノーマスは「解魂」と言った。すると突剣が伸びた。和明の服に触れたと同時に瞬間移動した。ノーマスの背後に回った和明は右斜め上からの袈裟切りを放つ。しかしノーマスはそれに反応し受け止める。ノーマスのスピードが徐々に上がっていく。和明は幾度も瞬間移動を織り交ぜながら攻撃したがまるで和明の行動をよんでいるかのように反応された。動揺する和明。ルナが解魂しノーマスを切り付けるがサイドステップで避ける。ミルキーのノーマスを狙った一撃も空振りに終わった。

「お前達は魔気を知らないようだな。お前らは神気と呼ぶらしいが」

「神気ってなんだ」

和明は息切れ切れに質問した。和明の背後に回ったノーマスは和明の首をチョップした。「ゲフ」

和明は吐血し意識を失いそうになりながらも剣を杖にして立ち上がった。

「神気と魔気は同じものさ。私のペットの火龍の仕返しをさせてもらうよ」

和明は絶対的な実力さを痛感した。今のままでは勝てない。和明はルナとミルキーに

「一旦退こう」

ノーマスは高笑いをしながら和明の心臓を突剣で貫いた……と思いきやワープしてかわしルナとミルキーを連れ瞬間移動でその場を後にした。

{つづく}

59話

和明達は一日休息をとった後サンザス山の仙人ミラドを尋ねた。ミラドはログハウスの前でペットの巨大な狼ルーニーの頭を撫でていた。

「強くなりたいんです。もう一度力を貸してください」

和明は頭を垂れミラドに頼んだ。

「やはり来たか。そろそろくるじやろうと思っておった」

「なんでわかったんだ？」

ミラドの発言に和明は疑問をていする。

「勘じゃよ、勘」

ミラドはそう言う胸元から黄金の錠剤を取り出し言った。

「三人共これを飲むのじゃ。そして戦い勝利し最後の力を身につけるのじゃ」

和明達はミラドの言に従い葉をコップに入った水で飲み込んだ。意識を失い倒れる三人。

+

和明は目を覚ますとまた広い四角い白い場所に居た。もう一人の

和明は立って和明を見つめていた。

「やっと来た。和明君。最後の試練だよ神気を体得するんだ」

「神気って何さ？」

和明の質問にもう一人の和明は答えた。

「それはね、上級魔族が使う魔気と似たようなものさ。凄まじいスピードで動けたり相手の動きが読めたりする。じゃあ行くよ」

もう一人の和明は和明の真正面に瞬間移動して縦切りをしてくる。剣で受け止める和明は反撃に出た。和明から見て右から左に切りつける。もう一人の和明は和明の側面から切り付ける。和明は何とか反応すしバック宙でかわす。

「和明君。目を閉じて相手の動きを読み取るんだ」

和明は言われた通り目を閉じる。和明は理解した。もう一人の和明の殺気が感じられたのだ。和明は横切りを剣で跳ね退けもう一人の和明が瞬間移動しようとした場所を掴み剣を突き出した。もう一人の和明は「うわ！」と言うと尻餅をついた。

「和明君、おめでとう。マスターしたみたいだね」

「ああ、お前のお陰だ。ありがと……う……」

とそこで意識を失った和明は倒れ伏した。

$\{ \sim \cup \}$

60話

和明は目覚める。そこはログハウス前の空き地だった。ルナとミルキーは仙人ミラドと共に木製の椅子に座り談笑しながらコーヒーに似た飲み物を飲んでいた。

「……和明起きた」

「相変わらず遅いわね。神気は習得出来たんでしょうね？」

ルナとミルキーが和明に話し掛ける。和明は

「ああ、勿論。早速ノーマスと再戦しに行こう」

和明は黒い剣を取り出した。ルナとミルキーはミラドにお礼を言う。和明の肩に触れた。和明は意識を集中し瞬間移動した。

+

「くっ！」

目を閉じた和明の右斜め上からの袈裟切りを突剣で何とか防ぐ魔族のノーマス。次に解魂した目をつむったルナの大剣が横なぎに払う。和明は瞬間移動でかわしノーマスはしゃがんで避けた。

「神気か、強くなったな」

ノーマスはそう言いながら目を開いていないミルキーのハンマー

の攻撃を受け止める。和明はノーマスの背後から三度突きを放った。ノーマスは二発の突きはかわしたが最後の一撃がノーマスの左肩に突き刺さった。

「ぐっ！」

ノーマスは青い血を流しながら距離をとった。和明は

「クリスタルさえ渡してくれたら命だけとはとらないぞ」

「クリスタルを渡せば自分は魔族の王に殺されるだろう。だから逃げはせん」

和明は瞬間移動してノーマスの右側面に姿を現した。同時に縦切りを放つ。肩からの出血が多いノーマスは横っ跳びに避ける。そこへミルキーのハンマーが振り下ろされノーマスの顔面を強打した。

「うぐ、痺れる……」

「ノーマス……終わりだ」

和明の剣がノーマスの首を撥ねた。

{つづく}

終話

和明は膝元までの浅いムルーの泉に入り赤いクリスタルを拾った。クリスタルはなぜか温かった。地面に魔源の石を置き剣を振り上げた石が自分の危機を悟ったのかぶるぶると奮えだした。そこでルナとミルキーがクリスタルの端を押さえた。和明は剣を振り下ろした。「バキ！」と音がしたかと思うと悲鳴に似た叫び声が一瞬間こえた。

「よし、後はルーノの森に行くだけだ」

+

「確かに魔族が一人も居ないな」

和明達は魔境に入り一人の魔族とも出会う事なくルーノの森にやって来た。和明達は草木を掻き分け不思議な扉を探す。三十分ぐらいで森の奥深くに入り込むと和明は忘れられない扉を見つけた。この異世界にやって来た扉だった。

「あれだ！」

駆け寄ろうとした和明だったが。

「待て」

と扉の後ろから赤い肌をした女が言いながら現れた。整った顔立ちでグラマーな体型の持ち主で鉄製の胸当てを着けている。

「魔族はルミエラ以外魔界に消えうせたはず……つまりお前は……」

と和明。

「そうルミエラだ。よくも我が同胞を消してくれたな。ノーマスも敗れたらしいな。この扉を潜りたければ我を倒すのだな」

そう言ったルミエラは和明目掛けて走った。手には両刃の剣が握られている。和明に切り付けるルミエラ。和明は瞳を閉じてルミエラの攻撃をかわし反撃に横切りを放つ。ルミエラはその一撃を防御しルミエラに迫っていたミルキーに突きを穿つ。ミルキーはハンマーでそれをガードする。ルミエラは

「解魂」

ルミエラの剣先を炎が包む。ミルキーがハンマーでルミエラの剣を打つ。

「くっ！」

ルミエラの体にまで電流が流れたのだろう動きが鈍くなった。ルナがルミエラの左腕を切り飛ばした。

「ぐわー！」

血をほとぼらせ沈痛な悲鳴を上げるルミエラ。彼女の胸を和明の剣が鎧ごと貫いた。

「ぐはっ！」

ルミエラは血を大量に吐くと仰向けに倒れ絶命した。和明はルミエラの胸から剣を抜き胸の中にしまい懐かしい扉に近づきドアノブ

を回し開いた。和明の眼前に広がっていたのはサラリーマンと思える人々が行き交う歩道だった。ルナが

「……和明は行っちゃうんだよね」

「ああ」

和明は頭を掻きながら答えた。

「……だったら私も行く。こっちの世界には身内は一人もないもの」

「ルナちゃんが行くなら私もついていくわ。三年前に私の最後の血縁者の母も死んじゃたしね」

ルナとミルキーはそれぞれ意思を示した。和明を先頭に三人は不思議な扉を潜っていく。そしてその扉は閉められた。

{おしまい}

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0055u/>

異世界への扉

2011年10月17日03時16分発行